

七  
バ  
ス  
ト  
ポ  
ー  
ル

明治  
37 8 31  
内交



マコラフ砦陥落の圖

# セバストポール目次

目次	目
第一回 破題	一
第二回 戦争	一〇
第三回 上陸——アルマ河上の戦闘	二一
第四回 防禦	二九
第五回 包圍攻撃	四一
第六回 初度の砲撃	四五
第七回 コルニロツフ提督の葬式	五〇
第八回 パラクラヴァアの陣營	五五
第九回 インケルマンの戦闘	五九
第一〇回 セバストポールの命脈	六二
第一一回 副提督イストミンの戦死	六六
第一二回 再度の砲撃	七一

第一三回	新提督ホール、ステパノウイツナ、ナキモツフ將軍……………七六
第一四回	アレキサンドロウイツナ、クルーレフ大將……………七九
第一五回	前塞の退却……………八二
第一六回	第三回の砲撃……………八八
第一七回	提督ナキモツフ將軍の戦争……………九五
第一八回	第四回の砲撃……………一〇〇
第一九回	第五回の砲撃……………一〇一
第二〇回	第六回の砲撃……………一〇六
第二一回	マラコフ砦の陥落……………一一三
第二二回	セバストポールの訣別……………一二一

附録

玉宮の美女……………

目次終

セバストポール

露國皇帝 亞歷山三世 著

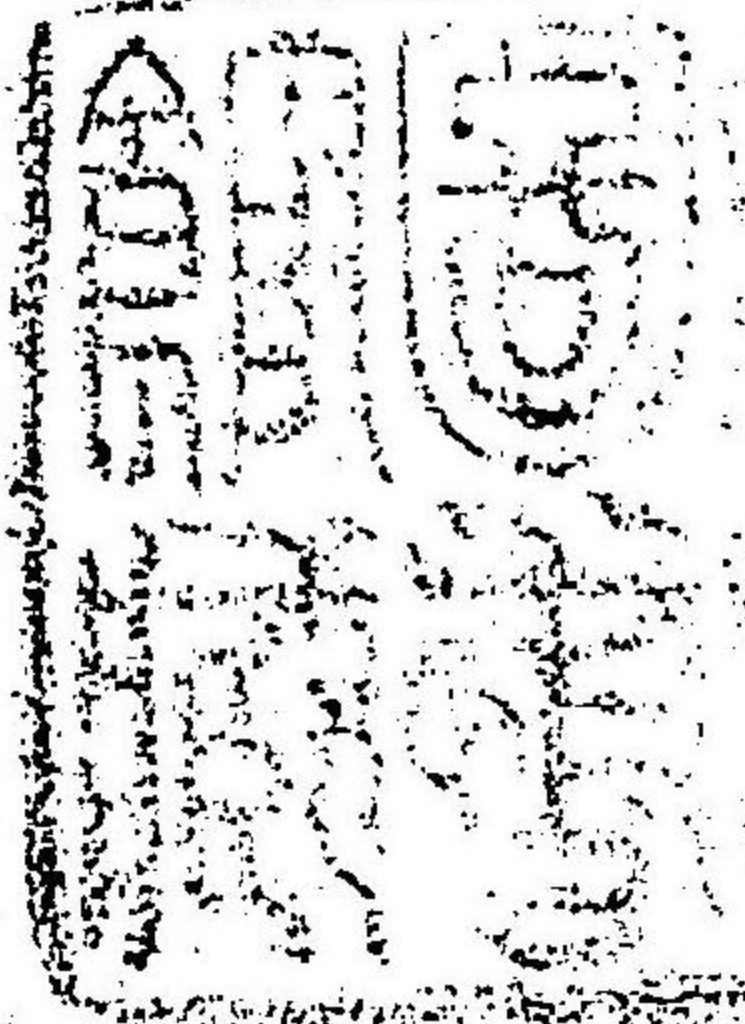
文學士 内田 旭

原口 春 鴻 譯

田中 花 浪

柳川 春 葉

(一) 破題



噫、セバストポール！  
 街衢として左程廣くはなし、復際立つて繁華でもないけれど、其  
 セバストポール市は、永久不滅の光榮を冠せられて居るのである。  
 然し此光榮を擔へるセバストポールは、今や優勢なる敵軍鼓聲の  
 下に屈服したのだ。屈服と言へば此上ない思はしい事ではあるが、

セバストポールの屈服は實に名譽の屈服である。  
 セバストポールの爲には、朕の勇悍なる幾多の猊貅は犠牲に  
 供せられ、其尊むべき鮮血を瀧いで飽まで戦つたのである。セバ  
 ストポールは、彼の爲に戦ひ、且つ彼の名譽の爲に斃れた、その  
 幾多殉難の勇士を忘れぬであらう。  
 老いたる人は、愛孫の頭を撫ながら夫の雄々しき物語を聞かせ  
 るであらう。セバストポールの壘壁の下、如何に我が露國の兵士  
 は國名と國旗とを汚さないが爲め、如何に花々しく戦死したか、  
 また邦家を泰山の安きに置かんとして、己が一身を鴻毛の輕きに比  
 し、如何に殊死して奮闘し、又た如何に一身の安全の爲に敢て敵  
 に降伏せなんだかを。

セバストポールとし云へば、一言にて直ちに其と知り得べき、  
 朕が大帝國の邊陲なる一都會である。而して人々は此光榮ある市

街が、如何なる事變の舞臺と成つたか、甚麼な理由があつて敵の  
 大軍が其周壁の前面に現出れたり、何故に又た鮮血を流して迄も  
 争つたかを知つて居るであらうか。朕は今、开を知らぬ人々の爲、  
 爰に一篇の物語を綴るのである。

未だうら若き村人、さては學びの道に就かぬ幼童も亦等しく、  
 徒然なる夜語に、朕が此のセバストポールを播き、悲壯快絶なる  
 物語に耳を傾けよ。さらば環座の内、誠に陣頭に立つて平然自若、  
 胸には慈愛の充てる情を包みつゝ、手には劍戟の火花を散らせし  
 昔時を忍ぶなる、老いたるセバストポールの勇士も無いことはな  
 からう。

女帝ガザリン二世陛下は、國防の忽にすべからざることに種々  
 疑懼を勞させ給ひ、よしや敵國の艦艦海を壓して、我等を攻撃す  
 るとても、一擧の下に退散せしむべく、黒海海上一隊の艦籍を留

めしめん爲め、要害堅固なる上、便利の根據地を搜索することを命じ給うた。

四

茲にクリミヤの唯ある海岬に好個の地を求め一市を建設し、名けてセバストポールと云ひ、直ちに艦隊の建設に着手したのである。斯くて間もなく、黒海海上に我が戦艦を見る事が出来た。其の戦艦は暴風怒濤を事ともせず、敵にも恐ぢず、威四海を壓して、我が大露國の國旗を翻しつゝ、堂々海上を遊弋する黒海艦隊である。

艦内に乗組める將卒等は一家族のやうに互に馴親で、恰も我が農夫等のそが永久の寵を喜ぶに等しく、只管己が船を愛して居る。海を家なる彼等は、水に慣れ、波に慣れ、體を呑むべき荒濤にも慣れて居るのだ。かく彼等は水の上に生活して居るが、又水の中で死のである。さらば海は眞個に彼等の故國で又墳墓であると言

はねばならぬ。

若し乗組員が永久の眠に就けば、其遺骸を黒色の清淨なる布に包んで、艦内の僧侶に引導を授けしめ、かくて後同乗の戦友等は永劫の訣別を告げて、紺碧藍を湛ふる大海原の底知らぬ深みへ沈めるのである。又彼等は時折休息せん爲に、戦艦をセバストポールの港内に停め、其處で筋骨の慰安を得るので。

我が海軍軍人は、屢々名立たる敵と其力量を角逐し、其の度に露國人の勇猛なる事を明示して、座ろに敵の心膽を寒からしめた。果して新に建設せられた黒海艦隊でさへ、已に業に、幾度も前代未聞の勇豪なる行動により、世界萬國に馳名を發揚したではないか。屈指れば、最初其艦隊の進水されてから、未だ漸く四十歳を経ざる内、早くも土耳其の軍勢を粉砕したのだ。いでや朕が露國の臣民よ、汝が兄弟は、當時如何なる態度を執つて敵に當り、茲

五

に大露國の名聲を萬國に轟かせ、其時代思潮に嶄然たる頭角を顯はしたかを聞け。

一日の事である。我が艦隊中の一支艦は、土耳其の海岸近くを巡航して居つた。其の艦には十八門の大砲が備へつけられて、艦の如き勇將コザルスキーは、親から指揮官となつて割乗して居つたのであつた。時に天麗に風死し、波さへ立たぬ蒼海原は土耳其の山を浮べて、恰も圖書をのべたかのやう、艦足早き艦のゆるぎは静けき波を泡立たしめ、ふりさけ見れば、唯だ淡く微かに雲垂れてゐるばかり。艦は益々速力を早めて近海を遊戈して居つた。……すわ事ぞ、雲は見る／＼條立つて正しく煤煙と知れ、艦形も明に、今や我乗組員は、二隻の土耳其軍艦が、我が艦を追ひ来る只ならぬ氣勢を見届けたのだ、何事ぞ、我れを弱敵と見て侮つたのか、土耳其の軍艦は約二百門の砲礮を据ゑつけて、

益々近く追及してくるので、コザルスキーは部下の將士を招集し、茲に會議を開いた。彼は、

「大露國帝國の國旗を敵手に委ね、全艦の將卒面縛して降を乞ふか。若くは力の限り奮闘し、止むなくんば、銳利なる我艦の衝角もて敵艦の要所を突き破り、敵將共花々しく沈没せんか、何れ非にして、何れ是なる。諸子須らく早答ふべし。」

と嚴たる舉止、凜たる音吐、愛國の決心は自と眉宇の間に表はれ、威已に敵艦を呑み、茲に最後の策に付て諮問つたのであつた。すると幾多の將士は驟然として異口同音に、

「共に沈まん。」  
と答へた、嗚呼、聞も雄々しき此の答辨！コザルスキーは莞爾として、

「可なり、可なり。然りと雖ども先づ協力して敵を撃退せん、事

成らずば死せんのみ。徒に死を喜ぶは迂なり。今後又更に幾度も死の機会に遭遇すべし。いざさらば力の限り艦を進めよ。」  
と、瞬間に戦闘の準備を整へ、又已むなくんば艦諸共に破砕する覚悟せよと、乗組の兵士に嚴かなる下知を下した。  
敵艦は間近く進んで来た。

「降れ！」

と、嘲る如く信號旗を風に翻しつゝ、憎さげに我を洞喝したのである。我が艦は轟然一發、砲門を開いて此に答へた。

激戦の幕は開かれた！

全き三時間には接戦砲撃の中に過ぎ、彼我より撃て交す榴弾、爆烈弾の轟は般々として、電光閃き、激浪上り、海若の静けき夢は破らるゝと共に、天地も碎けんばかりの凄じさ。硝煙は晴れたる海を覆ひ、間時は勝敗の關を隠して居つたのであつた。生ける心

地なき此の修羅の巷に、我が艦の將卒は縦横無碍に奮戦して、さしもの大敵を事とせず、勇を鼓して力戦した爲め、敵は脆くも敗走した、……多大を頼める敵は終に敗れたのである。

此の勳功に因り、コザルスキーは階級を進められた上、サン、ヨヨルキの勳章を授與けられた。且つ皇帝はコザルスキーの申請を嘉納し給ひ、その部下の忠誠なる將卒等にも、終身年金を給はるべき厚き恩賞があつた。



(二) 戦争

然りながら、茲に我が露國の艦隊にとりて、大に心を碎き、籍に思を凝すべき日は來たのである。

黒海の地や、其の一邊は我が國の版圖に屬して居るのだけれど、對岬の廣濶なる地には、土耳其帝國が、蠕々として肱を横へて居る。

由來土耳其は、其の臣民の内に一千二百萬の正教徒があるにも拘はらず、未だ嘗て虐待するやうの事は露更なかつたのであつた。と言ふのは、常々我が露國が彼正教徒等に利益を擁護して居つたからで。

これより先、我が露國とサルタンとの間には、此事に關する條約を締結してあつたので、我れ等と同一教祖に信頼する土耳其の

戦

争

正教徒は、我が露國帝國の庇護の爲め、何事となく心安らかに、安全なる生活を送る事が出來たのであつた。前後八十年、該條約は何事もなく相互に服膺されて居つたのである。然るに俄然、該正教徒は神を異にせる土耳其人に虐待さるゝやうになつたので、哀れにも我が露國に憐愍を懇願した。

時の皇帝ニコラス一世陛下は、直ちに往昔の條約を強固に履行するに就いて、回々教徒たる土耳其皇帝に促したけれど、土耳其皇帝は頑として其を諾はせ給はぬのみか、我が露國との國際關係が、容易く治ることはなからうと豫測したのであらう、應援を英佛兩國に乞はれたのであつた。

談判は土耳其の首府、コンスタンチノールで開かれた。ニコラス皇帝の派遣された我が露國の皇太子ツナコツフと、深く回教徒に同情を寄せる英國の大使とは之れに列席して居つたので

ある。談判は長く繼續したのにも拘はらず、明快に解決されなかつた。併し我が皇帝は事の平和に落着せん事を希望んで居られたけれども、土耳其政府は、己に最後の手段に出つべき準備を整へて居つたのであつた。

朕は重ねて聲高く絶叫する。黒海は我が版圖と土耳其との間に開展されたる海である。然り土耳其帝國はその半周を劃して、露國版圖の二方に接して居る。

即ちニコラス皇帝は、ダニユーブに接近して居る土耳其の地を侵略せよと、我が陸軍に命じ給ひ、同時に艦隊に向つて出陣準備の下知を下されたのである。今や、陸にも海にも、着々戦闘準備は整うて、いざ戦端を開く曉には、直ちに回々教皇帝の軍を攻撃する事が出来る迄も整つてゐた。

萬事休す。明瞭なる條文があるにも拘はらず、回々教徒は何故

にや斷乎として露國との調印を拒み、彼の皇帝は明日に其の宣言を爲れたのであつた。メンナコッフ太子はコンスマンナノープルを見捨て、歸國せられた。と同時にクリミヤの陸海軍の總督に任命させたのである。

土耳其に對して戦争は開始された、戦闘の警鐘は今や響々鳴り渡つた。

折しも黒海を遊弋して居つたナキモッフが指揮の艦隊は、此宣戦の布告と報知とを、突然セバストポールから聞き得たのであつた。けれどナキモッフは更に驚かず、又喜もしなかつた。ガナキモッフは數年の久しき間、腕を撫しつゝ、事なきに倦み、一度は好機會あれかしと待ち詫びて居つたので、茲に祝典を擧げて兵卒を稿ひ、大なる偉功を奏せよかしと、直ぐ様敵艦の搜索に着手した。纏て彼は土耳其の都會たるシノープの近海で敵と邂逅したのであ

我が乗組の將卒は、徹に立昇る艦の煤煙、灰に見ゆる艦の帆影を認知るや否や、飛立つばかりに打喜び、踴躍して戦鬪の準備を爲終つた。間もなく、戦端は開かれて、互の艦より砲火を交ゆる最中、彼方市街の方より猛烈なる砲丸は、雨かとはかりに飛來つて、いたく我軍を惱ました。怖るべき砲丸が彼我の戦艦に命中して、物凄く爆烈するので、甲板は血に染つて、死屍は山の如く累累と積み重なる。

唯見れば、シノーア市は火を被りて、烈々たる燄天を焦し、多くの土耳其軍艦は、我が猛烈なる砲火に得堪えで、火を失して炎と燻え上るものやら、機關を撃壊されて進退の自由を失なつてゐるものやら、何れも荒れ立つ波に輪を切つて沈んで終つた。見ると哀れの半月旗は我が露國軍旗の面前に破却されたのである。

かくて敵艦の全力を粉砕し盡した時、耳をも聳せんばかりに、「萬歳、萬々歳。」

との祝聲が遙か際涯遠き海の果迄も響き渡つて、我が艦の勝利を報導されたのであつた。世に謂ふ「シノーアの戦」とは此の勝戦を呼ぶので、敵は自ら敗戦を招いて我が露國艦隊に偉大なる名譽を施さしめたのだ。

ナキモツフは狂せんばかりに打喜び、若返りした意氣で、揚々としてセバストポールへ凱旋した。さなきだに此の戦勝に狂せんばかり欣喜せる全市民は、老いたるも若きも、軍食壺漿してナキモツフを歓迎した。皇帝は厚く其の功績を頌せられ、深く彼を賞せられて、カン、ヴォルガの勳章を授與されたのである。

シノーアの戦捷は歐亞の天地に響き渡つた。で英佛兩國は更に我と商議を開き、我が露國をして黒海に於ける海上の自由を承認

せしめん事を要求した。何たる事ぞ、如何で捷利者の斯の如き協  
商に調印を許すべき。かゝる事は唯人でも辨へて居るであらう。

皇帝ニコラス一世陛下は斷して之を斥けられたのである。

かくて我は一步を譲らず、彼れ英佛の兩國も亦固く執つて動か  
ず、其が爲め商議は終に圓滑に局を結ぶ事が出来なかつた。

英佛の兩國は茲に於いてか我に對して戦を布告した。而してサル  
タンと連合して、直ちに各自の艦隊を黒海海上へ派遣したのであ  
る。

英佛の艦隊は土耳其の港内に碇泊して、軍需品は何でも落なく  
整へる事が出来る爲め、凡ての武器を海上遙に本國から満載して  
來た。

土耳其は又土耳其で、此の機を逸つせず、更に軍備を整頓した  
ので。

かくて聯合軍は其の準備の整ふや直ちに土耳其の海岸を後に見  
て、海陸諸共優勢なる軍を帥る、我が根據地として攻め寄すとの  
ことに、セバストポールでは、敵に劣らず要害を堅めたのであつ  
た。併し其の當時、露國の文明未だ普ねからず、鐵道とても唯僅  
しか布設せられて居らなかつたので、一千ヴェルスト以上も隔つ  
て居るセバストポールへ大砲を運搬し、又多くの軍隊を輸送する  
のは頗る困難なる事業であつた。加之敵の兵力に伯仲するだけ  
の兵力もなく、萬事不足勝で、俄に少なからぬ供求を要するさへ  
殆ど支へ得ぬばかりの大なる打撃なのであつた。

黒海のクリミヤの岸に彎曲し、深さ一ヴェルスト、廣さ六ヴェ  
ルストの一灣をなせる處こそ、即ちセバストポールで、陸に面し  
た右側を北岸と云ひ、其左側を南岸と稱へ、實にセバストポール  
の市街はこの兩岸に連つて展開して居るのである。而して船艦の

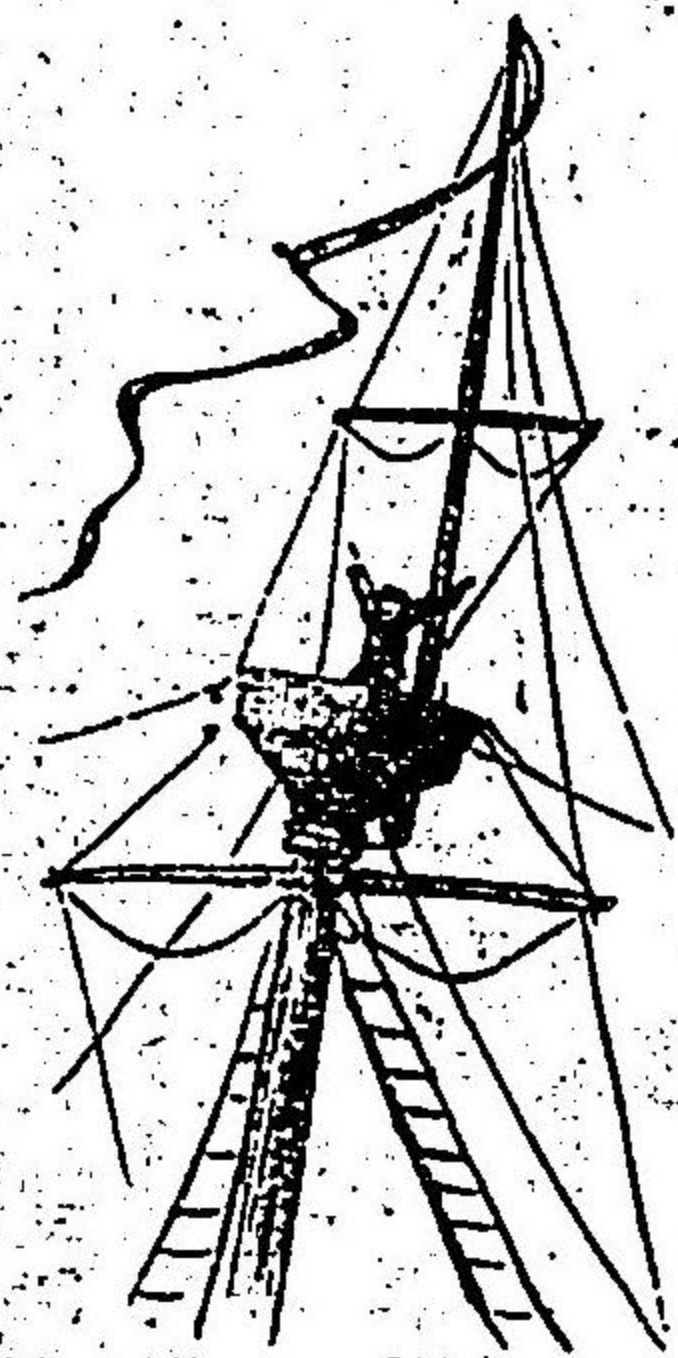
碇泊する港は其の北岸で、人家寺院の宏壯なるものは、重に南畔に綺羅を盡して建設されて居る。北岸の人家と云へば、唯だ名ばかりの貧しき、殆んど堀立小屋に近いのが建て、あるばかり。兩岸の間は小さな僻を以て往來するので、萬一行路を陸に撰ばうならば、勢ひ此の灣を一周せねばならぬのである。海岸の此處彼處には稜角岩峙ち、海上より寄せ來る敵を禦ち拂はんと、嚴然として待構へて居るかのやう、宏大なる壘濠の彼方には、市街を圍繞せる砲壘高く聳へ立ち、その砲壘の口々は砲門を据ゑるやうに設けられてある。猶凡ての點々流布せる砲壘は一直線の上に連つてゐるのではなく、舷形に彎曲し、各自形と名稱を異にして居る。若しも敵軍我がセバストポールを占領しやうとせば、須らく此の砲壘を剽す粉碎せねばならぬのである。けれどもこれは甚だ困難なる事業と言はねばなるまい。

優勢なる敵の艦隊は近づいて來た。此セバストポールを攻撃する爲に、

此より先き、我露國は、海上よりの攻撃に備へん爲め、古びたる岩を繕ひ、又は新なる壘を築くに全力を濶いで居つた。茲に武装したる市街を攻撃するのは甚だ容易の事でないと共に、苟も、蓋し一市街を武装するのは中々な事業であるのだ。さるにも係らず此の至難なる一世の大事業を完成させたのは、全くトットレーメンなる偉人の力である。さらば露國に生を棄け、安泰平和に日を送る事の出來たほどの人々は誰れでも、トットレーメンなる名を暗じ、且苟にも其高大なる徳を忘れてはならぬ。

トットレーメンは一箇の技術家に過ぎなかつたけれど、彼は自信と名望とに依つて委任された此の邦家の一大工事を、夜を日に次いで必死に取急ぎつゝ、其深達なる學理を應用して見事に成効

させたのである。  
暗、永き歳月の間、倦まず撓まず、勉めに勉め、勵みに勵み、  
研究に研究を積み、徹夜に徹夜を重ねて工事に熱注し、遂に強猛  
なる榴弾でも、乃至爆烈弾でも容易に破壊する事の出来ぬ、堅守  
無比なる難攻不落の砲壘を建築したのであつた。



三 上陸マルア河上の戦闘

敵は海から我を攻撃しやうとはせず、却つて、セバストポール  
に六十六露里距つた我が海岸に、其の陸軍の全部を上陸させた。  
これを實に一千八百五十四年九月初旬の事で、此頗る優勢なる敵  
の上陸軍の爲に我軍は日ならずして包圍されたのであつた。要す  
るにクリミヤ一帯の地は、我皇帝の臣民たるタルタル人の住ん  
で居る處である。けれど彼れタルタル人は土耳其人と同様の異  
教徒である處から太くサルタンの臣下となるを欣んで居たらしく、  
聯合軍に援助けられた彼等の同教徒は、我が海岸に上陸した聯  
合軍に向つて注意深く構軍したのみか、各村落から委員を選んで  
敵陣を訪せたのであつた。敵の大總督は限りなく打欣んで彼等委  
員を歓迎した。で委員等は全教徒に代つて、軍需を補足すべく、

家畜、車輛、其他苟も軍隊に必須なる物品を徴發せんと約した。我が軍は聯合軍の上陸と同時に至大の壓迫を加へられたのである。當時のセバストポールは海に向つて居る方面こそ防備を嚴重に施こしてあつたれ、大陸の方面には一箇の砲壘の備へだになかつたので、若し此の方面から攻撃されうものなら、一千八百二十一年恰もナポレオンがモスコイを馬蹄にかけて、意のままに深く露國の内地へ侵入した時と同じやうに、何の障礙もなく恰も平野を行く如く、いと容易く備へなき市街を屠り得るのであつた。それと知つた太子メンテコッフ殿下は、機を誤たず一千五百名の職工をして、トットレーベンの指揮の下に、又も夜を日に次で大陸に向つて砲壘を築造させられたのである。而して自は及ぶ限りの大兵を引率して、身躬ら陣頭に駒を進め、雲霞の如く群れ来る敵軍指して前進されたのであつた。時しも敵は海に沿うて、犇々と

セバストポールに行軍する途次であつたので、太子の軍は端なくも此の勇猛なる敵軍とアルマ河上に衝突しかくて茲に第一の陸戦は開始されたのである。時は恰も耶蘇降誕の日！冬の空は晴々と澄渡り、淋しい日影は和しい光を投げて一點の塵だも漂はぬ日和。されどこゝに戦端を啓くべく我に執りての希望ではなかつた。見よ！我が戦列の兵士は唯三萬二千人。聯合軍は六萬。殆ど二倍の兵力を有して居たのである。が兵力の多寡を以つて辟易する如き我軍では無い、此處にアルマ河邊、海岸を去る程遠からぬ所に世にも稀なる大激戦を開始された。敵の先鋒が今しも我が前衛に接近すると見るも瞬く中、艦隊からは百餘門の大砲を轟かせ、其猛烈なる一斉射撃を我軍に浴せかけた。凄じい砲撃！見る／＼其的となつた我が將卒は、敢なく戦場

の露と消え、屍は算を亂して横はり、流る、鮮血は泉のやう。けれど勇敢なる我が軍は、唯々勇み猛るのみ。鏖る、屍を乗り越え踏み越え、天地を揺かす呐喊の聲唯鬼神の如く突進する。然し鐵ならぬ人の身の、激しき敵の十字火を蒙つては、見る間に前列悉く戦死して今は全きものとは無い。斯くと見た後隊は、入れ替つて同じく敵陣に突貫を試みたが、此の勇壯なる振舞も全然無効に飯したのであつた。思ひ見よ、全き四時間は激戦の最中で、般々爆々たる銃砲の轟き、喧々囂々たる人馬の聲、劍戟の響、馳突の蹙音は負傷者の痛苦の呻吟を遮断して、痛みに泣き、又は水を求むる頻死の叫も聞取れぬ位であつた。斯て我が軍は多大の戦闘力を殺がれ、隊形を保全得ぬ位に敵に蹂躪されたのだ。加ふるに其疲勞は筋骨の自由を缺く迄に立到つたので今は退却すべく餘儀なくされた。輜重の車を以て負傷者を運うとしたけれど、餘り

多数な上に敵の進撃が猛烈なので、悉く収集する暇なく、殘餘の者は、止むなく敵手に委ね、其儘戰場へ放棄して退却したのであるけれど、此の事に關して我等は敵に對し何等の怨恨を抱かぬのである。敵は殊勝にも我が憐むべき兵士等を悉く戰場に収集してオデッサに送り、其處で其れゝの手當を施し、又は厚く看護したからで。

嗚呼我軍は退却した。戰場より二十五ヴァルストを力なく悄然と進つて、セバストポール市では早くも此の悲しき敗報を傳へ知り、全市民は悲嘆に掻きくれ、何れも切齒扼腕するのである。

今や危急存亡の秋！勝に誇れる敵は海陸の両面から我軍を夾撃するであらう。されど我軍は陸海共に其の侵襲に對抗する事は到底出來ないのである。敵は我より二倍以上の兵力を有せる優勢なる



軍であるから。

双眸に収め得られぬ程の艦隊は橋頭高く國旗を翻して、青海原の底から生えた繁き森のやうに、加之も刻一刻我に迫るのである。今尙は一晝夜の猶豫あるべし、此の敵艦の我が港近くに現出せん迄には。されど斯く知りつゝ、黙過出来やうか、否、例令如何なる障害があらうとも、事故があらうとも、之を跳越し、之を芟除し、彼の敵艦のセバストポールへ迫るのを防がねばならぬ、防ぐと共に撃退せねばならぬ。こゝに大なる犠牲を捧ぐべき覺悟を定むる場合に立至つたのだ、將軍コルニロツフは即ち將校會議を開いた。彼は先づ、

「我等は我が艦隊を引率し、港外道に、進撃せる敵の艦隊を待ち受け、以て強烈なる攻撃を加へ、彼を敗らざるべからず。萬一敗剣を招かんか、我等は我が艦を彼等の艦に衝突せしめ、一同協力を

して殊死奮闘せんのみ。かくして我等はセバストポールと、陸兵とを擁護せざるべからず。」と發議した。

衆皆固唾を呑み、此の雄々しき計畫を成就せしめんと、慨然として陳述した。さりながらザリンヌとナキモツフとは之に反對したのである。

「何人たりとも我海軍の強猛なるを疑ふ者あらざるべし。さなり、餘義なくんば死せんのみ。されど國家の爲めとは云ひながら、戦死を急ぐは勇士の本領にあらざるなり。寧ろ死期の來る迄大陸の方面に對つて戦闘を試むるに若す。されば生還を期し難き事、鏡を見るに等しき死地に趣くより、少時自衛して好機を撰手するを待つべし。」

二人は絶對的に進撃を否認し、防守を固持して動かないので、

爰に双方の議を容れて、港内にある我が船艦を沈め、敵艦の港内に進撃し能はぬ様に、港口を封鎖する事に決した。總督メンチコッパ太子も亦此の議を嘉納されたので、海軍は直に此の大膽なる動作を實行する事になつた。

コルニロツフは此の命令を實行せんとして、両眼に熱涙を湛へ、悄悄として出て行つた。艦で港口は封鎖され、沈没させた艦の乗組員は、何れも上陸して市中の砲壘に編入された。而して砲門彈藥なども、亦皆一様に陸上に移されたのである。



### (四) 防禦

コルニロツフは種々の感想に打たれ、靜に港を指して辿り行けば、水兵は之を迎へ悄然と扣へ居る。コルニロツフは彼等に向つて艦隊の運命已に定まれる事を傳へ、之れに對する必要なる命令を下した。即ち其の命令に因り七隻の軍艦は死の宣告を宣けたる犠牲の如く港口に並べられた。既にして其の帆は取り外され、大砲は陸上に運ばれ、幾多の水兵は水を浸せしむべく船体に穴を穿つ事に取かゝつて居る。夜の明くるを待たで、波浪逆巻く海底に、永久其艦を沈めねばならぬ。得も云はれぬ悲嘆と苦痛とに心膽を奪はれて居るコルニロツフは、廣濶海の如き胸も徐るに張り裂けんばかりであつた。

斯くてコルニロツフは陣營へ返つてくると、多くの水兵は彼を

門前に迎へて、等しく彼に懇願した。即ち今艦上に落ち来る災厄の爲に、何事も成さずで艦を水底に沈めんより、擧つて戦闘に従事し、已むなくんば後日更に其の命令に従はうと。是に於てコルニロツフは答へた。

「運命には従はざるべからず、さらば凡ての戦艦は犠牲に供すべしなり。往昔敵の大軍、モスコーに侵入したる時の如きも、我はモスコー全市を擧げて灰燼に皈せしめしにあらずや。」

と其の殊勝の願ひにいたく打喜びつゝも、彼は暗涙を呑んで順々として其不可能なる理由を説いた。

三隻の軍艦は夜の間に沈められたので、日の出る頃には海波渺渺たる處、其艦のさびしく水面より高く傾きながら突出せるのみ、雄々しき艦体は已に水底に沈んでゐた、纏て又他の三隻も沈められるのだ。あゝ他の三隻も亦。

併し、其の中の一最大い一隻、三聖號のみは、其の死を拒むものゝ如く、容易に最後の穴を穿たれなかつた。

「黒海は三聖號を沈没せしむるを許さず。見よ船體を呑みし波濤は、此の艦より遁逃するに非ずや。吾人人類の打勝つべからざる力は、實に三聖號を擁護せるなり。」

と水兵は眞面目で囁き合ふ。

實にや、此の艦のみは、其の名に因む三人の聖者に守護されつつあるのであらうか、又自が水兵の手によりて、死の宣告を受くるのを喜ばぬのであらうか、艦は海底に沈みもやらず、唯艦頭を擡げた許りであつた。

誰しも此の艦と別れるを好まぬ。けれどまた命令に叛く事も能はぬのである。又其の命令を果すべく手を下す者とはなく、衆皆愁然として暗涙に咽んで居つた。此の時一人の司令官は其の苦

閤を断たん爲め艦に向つて發砲した。一條の砲火が閃くと、その音響に連れて水兵は涙を拭ひ、端然として形を正した。艦は恰も瀕死の病者が臥床に打臥せるが如く、波間に動搖いて徐に傾むき初めた。

「負傷せる獅子に似たり。」

と誰となく言つたが、三聖號の最後は斯く豪宕であつた。水兵等は沈痛なる面色にて、胸に萬斛の悲を湛へつゝ眺むる様は恰も愛人の臨終に對するかのやう、熱き涙に咽ひながら此の世の訣別を告げた。見る内に大いなる波の輪が出来て、怒濤が泡立つたと思ふと艦は靜に蒼波に呑まれ徐々々と沈み行くのだ、……かくて三聖號は永久の眠に就いたのである。

此等戦艦に割載せし武器と彈藥は大抵各砲臺に運ばれ、一萬七千名の乗組水兵も陸上の軍務に服役する事となつた。彼等が其艦

を去る事が如何に悲かつたか、口を噤める様の却つて聲を限りに慟哭するに勝る優愁を持てる如くに感ぜらるゝ。

尙も空中に翻る軍艦旗を眺めては、自れを招くかと感ひ、風に戦ける波濤の艦體を噛む音を聞きては、我等を呼ぶかと疑ひて、數歩に一度、又一度、振り顧つゝ涙に濕む眼を瞬たく。

獨コルニロツフのみは失望せず、事に臨んで動せざる事恰も古武士のやうである。彼は至難の重任を其強健なる背に負ひ、全般の大事を一身に擔へる身の、あらゆる方策に心を碎き最後の決戦に對する策を考へて居つた。身の徳望と、非凡の活力で、衆望を自の一身に集めて居るコルニロツフ一度現はれん歟、部下の心は欣びと希望とに満されて、誰しも死を怖るゝ如き念慮が萌さないのだ。コルニロツフ將軍の陣列を點呼する時は、宛然新婚の祝宴に侍るかのやう、多くの將卒をして歡喜の裡に戰場に向はしむ

る力を有して居る。

彼は兵卒等に向いて、

「退却の企圖を爲すものは叛賊なり。萬一予にして退却を命じなば、毫末の猶豫なく、直に予を刺し殺せよ。」

と、かくては悲哀の情に驅けらるゝ露國戰士の勇氣は恢復され

た。身は降人となりて生命の安きを願はんよりは、寧ろ陣頭の花

と散り、屍を馬革に包まんと誓つたのである。此に於いてコルニロツフは必要なる命令を渾く傳へた後セハス

トポール市なる唯或る寺院の鐘樓に昇つて、其高い頂上から群れ

来る敵を睥睨しつゝ、その動作に落なく目を放つて居つた、ナキモ

ツフも亦た程なく來たので、其より以後二日間、此の兩將は疲勞

を知ぬ番兵の如く、いと、狭き板の間の端に、まんぢりともせず

座を占めて居つたのだ。此の間二將は眼前に迫り來る怖るべき敵

兵の爲め奈何心慮を傷めたであらう。彼等は絶間なく遠近を熱心

に眺め、而して耳を倚て風の齋す微けき音響迄も聞洩すまいとする

かの如く、絶えず敵軍の意味なき微細の動作のみに注意して居つ

たが其効空しからず、終に兩將は敵は海岸を奪つて山岳に向つて

進行する事を發見した。敵が今セハストポールを遠ざかるのは疑

も無く事實である。然り、敵は正面より我を攻撃せんとした最初

の企を抛つたのである。即ち敵は市街を一周することに定めたの

であらう、さらば迅速に再び我が面前に顯れる憂はないのである。

で、我が將軍は喜び極まれる叫聲を洩した。萬事は未だ休せざる

を、神よ、希はくは我等に幾何の餘日を與へ給へ、さらば我等は

協力一致セハストポールを修繕すべし、何等の防禦もせで、天下

唯一の天險を、如何で徒に敵手に委ねる事が忍ばれやう。

忽然、砲壘築造の命令は下り、急を告ぐる鐘音は鳴り響いた。

此の警鐘を開捨てず、全市民は擧つて起ち、凜々しくも此の招集に喜んで應じた。その時、「砲壘の上に登れよ、各自所要の場所に就けよ。」と誰とはなしに叫んだので、山なす群衆は潮の花の亂れ散るやう、右よりも、左よりも、見る／＼砲壘の上にと跳り上つた。老人も、幼童も、婦女子も商人も、さては僧侶、農夫の輩に至る迄、悉く指示されたる場所に就き、工事に對する命令を聞かんとて固唾を呑んで居る。

熱心なる工事は始められた。人々は休息を取らで打働き、小兒は小さき車を軋らせつゝ、土塊を遠くより齎し、婦女は前掛に砂礫を包みて運んで居るのだ。鋤鍬を握るもの、腕車を駆るもの、馬車もて石塊を運送するもの、朝は星を戴いて勞役につき、夕は又炬火を點して其の業務を勵む。而して甚だしき疲勞を覺えた時には

各自交代しつゝ、セバストポール市五六萬の人民は相携へて此の國家の勞役に服して居つたのであつた。而して其の數ある砲壘の中には、全たく纖弱き婦女子の手によつて築かれたものもあるのだ、それを「婦人砲壘」と呼んだ位。後に此等の婦女子は、ハンマヨルナの綬もて飾られたる銀牌の賞を授けられた。時に見張番をして居る兵士の課役を助けるものも居れば、町の人々が代つて番兵になるものもある。と云ふ風に全市擧つて公益の勞に服せん事を希ひ、兄弟の如く和氣霽然として勇み喜んで働作して居る。

工事を監督して居るトットレーメンは、彼方此方に馬を驅り、終日訓命を下す爲めに忙殺されて居る。又セバストポール市の獄内に繋がれて居た幾多の囚徒は、過去の罪惡を贖はんとてか、危急に沈淪せる市街の爲めに、赤誠を吐露して此の勞役に就かんと

哀願した。コルニロツフは爰に囚徒の監禁を解いて遣り、自由に業務に従事する事を許したので、囚徒等も亦身を忘れて日々殊勝に働いたのであつた。

多くの砲壘は瞬く間に峻功した。一週間の終には市街の南面已に堅牢なる壘壁もて圍繞され、其砲壘に備へつけらるゝ大砲は、左瞻右視來たらん大敵を撃退せんと待構へて居る形。就中最も秀で、充立せるはマラコフてふ丘陵の上に築かれた砲壘で、今も尙マラコフ砦の名は弘く世界萬國に轟いてゐるではないか。

ナキモツフ將軍と、モルレル將軍とは、共に己が司る指揮權をコルラロツフ將軍に譲らんと決心した。死斯已に眼前咫尺の間に迫れる危機一髪の秋、誰しも自が身の可愛さを打忘れ、心を傾けて、露國軍隊の名譽を重せぬものはなからう。

然なり、此れ等老練なる將官の眼中には、區々たる職權の高下

なく、滿腔唯だ一のセバストポールあるのみなのだ、而して其セバストポールは、今や敵の包圍の中に陥つて、コルニロツフ將軍の指揮の下に委ねずば、到底救済の道がないと思つたので。兩將軍はセバストポールを救済せんが爲め、欣然として潔くコルニロツフが麾下に列せんとしたのである。

二將軍は肅然としてコルニロツフに向ひ、「如恁臨終の觀を呈する如き場合に處せんには、唯一の決心と絶對の威嚴なからざるべからず。即ち君や兩者を具備するに止まらず、軍隊の主腦と渴仰せらるゝの人、宜敷將に主將として事を督すべし、余等は茲に君の旗下に列せんを希ふなり。」

と熱心に言つた。

稍あつてコルニロツフは快諾し、直ちに將に將として市街と艦隊との指揮を執つた、これぞサントクロア即位祭の前日であつた。

平時の如くに兵士等は彌撒を聴聞し、やがて戦列に就いたのである。其の間總ての寺院から聖像を掲げて奉祝行列を催し、僧侶は各砲壘を隈なく廻つて崇嚴なる祈禱を行ひ、法の水を散布した。而してコルニロツフ總督は各軍隊を巡視し萬死を期した將卒に向つて恚う言つた。

「我が部下よ、例令我が軍は此處に屍の山を築くとも、誓つてセバストポールの寸土をも敵手に委ねざるべし。」  
忠勇絶論の兵士は何れも肩を簀やかし、  
「然り、我等は命令に因つて死せんのみ。」  
と異口同音に答へた。



(五) 包圍攻撃

聯合軍はセバストポールを遠巻にして、南の方十二露里距る處に現れ、其處に大部を留めて、海岸に接近せるバラクラヴァの小市街と、其の附近の地を占領して陣營を築き、同時に艦隊を海岸に屯させ、海陸の兩面より我が軍を包圍攻撃しやうと企てたが、彼等は我が猛烈なる砲撃に打腦まされ、一直線に市街に接近する事を爲得なかつた。それと共に一計を案出して、濠を廣く堀つてセバストポールに對して溝渠を作成する事を爲始めたのであつた。さらば若し敵にして我が市街に砲彈の達する迄、其溝渠工事を前進せしめんか、彼等は直ちに溝渠によりて戦鬪隊を輸送し、砲壘を築き、壘の土堤に身を伏せつゝ、我に向つて發砲を始めるであらう、而して日を経て一層遠く前進し、又たもや溝渠を開鑿し、



歩一歩近く我に迫るに相違ない。然り敵は我軍の阻碍を恐れて夜中に工事を急ぎ其溝渠と砲壘とを築くので、前夜迄は何物も無つた處、日の出づる頃には忽として新築の砲壘を見るのも珍しからぬ事であつた。

却説、アルマ河上の戦闘で、衆寡敵せずして敗れたメンナコフ太子は、軍を率いて恙なくセバストポールへ歸隊した。そは聯合軍が途をバラグラヴァの方面に取り、敗軍の歸路を断たすに、交通を我の自由に任したからで。セバストポールの住民は、待ちに待つたる兄弟を迎ふるかのやう、太子の軍を迎へたのであつた。かくて後協力一致、敵の來襲に備へて居つた。

コルニロツフは副提督イストミンに命じ、マラコフ砦の指揮を一任せしめた。イストミンは幼時から船中に生長して勇烈無双の名ある剛者で、齡尙若冠の十八歳の時にサン、マヨル十字章を

授けられた程の人物である。曾て數度の戦争に、いつも身を挺でて衆に先ち、雨なす砲丸の下に萬死の境に出入した事は數へきれぬ程の經歷を持つて居る。それ故多くの水兵は、「人々よ、我がウラヨミール、イヴァノウイツチ將軍の頭腦を有するを聞かずや。」

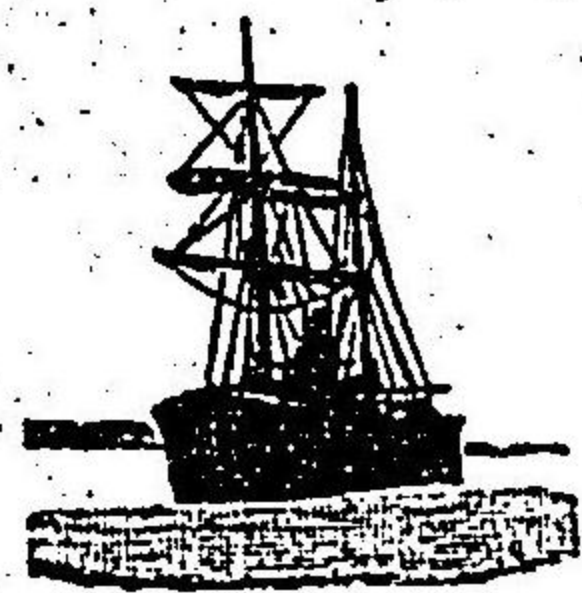
とのみ言つていたく彼を畏敬して居つた。

然るに今やイストミンは馴れにし海を後にして、其愛せる艦に別を告げ、茲に陸上生活を營まねばならぬ事態となつた。抑も如愆事は大陸に馴れない彼に取つて頗る困難であるのにも拘らず、イストミンは例令馴れざる陸上に於ても、大海原に於ける如く、一に我が露國の爲めに盡さんものと覺悟して居つた。

彼れは部下を一層奮勵せしめんとして、先づ己が身を強く鞭ての諺に鑒み、常に倦み疲れたる色を表はす事なく、且つ毫も愁は

す、熱心に活動するのである。  
彼は今、マラコフの丘陵に佇立ち、嘗て艦上に居つた時と變りなく、同一秩序を整へて敵の大軍に當らん事、又防備おさく怠りなく敵と見れば其如何を認知せずして軽々しく闘争を挑む如き事無を訓誨した。

四



(六) 初度の砲撃

聯合軍は安閑として徒らに時を移すやうな事を爲ぬ。日一日我軍に向つて溝渠工事を進め、十月三日には早やもセバストポールを砲撃しやうとしたのである。すはや砲撃開始されん！と見て取つたコルニロツフ總督は、直に馬に打跨り、其れく注意を與へん爲め各砲壘を巡視した。  
總督コルニロツクが幕僚一名とコザツクの一騎を従へて、ある砲臺へ行つた頃は、既に砲戦開なる頃であつたのだ。此の繞勇無比なる總督を見た砲員は、愁眉を開いて我知らず萬歳を叫んだ。  
静に々々。我が部下よ静肅なれ、我が射撃の爲め敵の砲壘沈黙せんか、其の時こそは、萬歳を絶叫すべきなれ。  
と嚴に言聞かせ彼は馬首を廻らしめてマラコフ岩へ向はうとし

たので、衆皆な總督の身を危み、

「閣下、マラコフ砦に行くを止めよ。」

「マラコフ砦には敵の榴弾雨注せるを以て、恐くは閣下の身に  
大事あらん、行くを止め給へ。」

と口を揃へて止めたが、鬼神をも挫くべき勇將の前には、怖る  
べき敵の榴弾も何かあらん、コルニコフは微笑を以て其厚意を  
謝し、稍あつて、長鞭一揮、遙に遠き方へ馬を躍らせた。斯くて  
彼は爆裂弾、榴霰弾の絶え間なく頭上を掠めつゝあるも、神色自  
若、終にマラコフ砦の丘陵に着いた

コルニコフは飄然と地上に飛び降り、乗馬をコザック騎兵に  
渡して砲壘の内へ進み入つた。此時マラコフ砦は強剛なる敵に對  
して痛快なる任勢を遂行しつゝあつた時で、多くの勇士は斃れ俯  
し、死屍は山の如く、傷者を運ぶ擔架卒の往來絶えず、殘餘の兵

士は大砲の傍に突立つて、砲撃に我身を忘れて居る。

將軍イストミンも又た砲火の真中に立つて、凜乎として不動の  
姿勢を保ちつゝ、聲を限ぎりに部下を叱咤しつゝ指揮して居たが  
其の砲丸の雨注する中へ、總督コルニコフが静々と巡視して來  
たので、自己が身は戦死を覺悟してゐるものゝせめて總督に不慮  
の無いやうにと、強て退去を乞うたのであつた。されどコルニコ  
フは、唯だ微笑を湛へたのみで、答もせず尙も深く壘内に辿り  
入り、忠實なる兵士等を慰撫しながら、殘る限なく砲壘を巡視り  
やがて壘外へ出て行つた。かくて將軍は鞍に打跨らんとてコザッ  
クより受取つた手綱を引搾り、鎧に足を懸けやうとした一刹那、  
一步二歩踏跟いて挫と後様に倒れた、憎むべき敵弾は、總督の一  
脚を奪ふたのである。近邊に居た兵士は驚いて駆け集まり、打ち  
列べたる二門の砲身の間に静かに臥かしたが、其蒼白の色は見る

彼の顔を蔽ひ、總督は呼吸苦しき聲を張り上げて、

「部下よ、極力セバストボールを守護せよ。」

と言ひ了つて、眠るか如く双の眼を閉ぢたのである。

醫師は駆けつけ、應急の手當を施したので、死せる如きコルニ

ロツフは再び正氣に立歸つた。そこで野戦病院へ送らねばならぬ

場合であるが、不意の事に將卒は悉く愁嘆にかきくれ、唯れ一人

總督の身を助け起さうとするものとして無い。コルニロツフは力な

げに両手を地上に突き、辛くも身を起して小車の上に靠れかゝつ

た。

かくて衆人の悲の裡に病院に達し、僧侶より聖餐を受けて後、

コルニロツフは妻子の事どもを思ひ浮べ、最後の告別を遣し、忠

誠の心を翻さず國家の爲めに盡せよと我が子を勵す聲も徹れて、

業に絶えくになつたが、露國の爲め、セバストボールの爲め、

さては親しき艦隊の爲め、皇帝陛下の爲めにとの思は一分時たり

とも心邊を去らなかつたのであらう。

勇將コルニロツフも激しい苦痛に堪ゆる事が出来なかつたのか、

胸の底より響くが如き呻吟を立てるので、醫師は薬を服用せしめ、

静に眠に付かしめた。

此時恰も、英軍の砲隊は沈黙したとの報告を傳へて來た者があ

つた。其を聞いたコルニロツフは、最後の力を咽喉に集めて、

「萬歳、」

と叫び其蒼白の顔を枕の上に落した。あゝ、總督コルニロツフ

は黄泉の客と成つたのである。

(七) ヌルニロツト提督の葬式

幕僚の士は等しく、ヌルニロツト提督の死を彼の軍隊に秘せんと務めたけれど、黄昏の頃には隊の上下何れも提督の死を嘆じて居つた。而してせめては英傑の死骸なりとも拜せんとて、涙にむせびつゝ群れくる兵士は數へきれぬ位であつた。

翌日の點燈頭、此名譽ある亡骸を總教長ラザレフの墓側に葬つた。

日は早やく西嶺に暮き、炬火の星光は哀れの行列を照して、實に千萬無量の悲であるが、知らず顔なる敵は此時迄も絶えず我を砲撃し、提督の屍が永久の安眠地に到着した後も猶且砲彈の霰雨に襲はるゝのであつた。されど我軍は、艦隊も、陸兵も、共にコルニロツト提督に最後の禮を盡くした。砲隊は一聲に吊砲を轟か

せて其の勳功を頌し、船艦は吊旗を掲げて其の徳を敬しつゝ、聯合軍は一舉に、セバストポールを陥落れんと構いて、艦隊を海岸近くに躍進せしめ陸海擧つて我軍を攻撃するので、其數百門の砲口よりは間斷なく猛火を吐き、激しく我を砲撃すると共に、七露里に跨る我が砲壘も其全方面より同じく砲彈の雨を降らして應戦する、我が彈着の下に敵の戦列はますます、明瞭になつた。

死は何の憚る處もなく我が露軍を損せしめるのである、されど我が勇猛なる將士は、傷者死者の間に立つて一門終れば一門と、いと沈着に發砲に勉めて居る。就中第三砲壘の損傷は他に比して殊に激しかつたけれど、砲員は毫も元氣を沮喪せず、鬪争の激しくなるにつれて益々勇氣を奮ひ起し、能く防戦して一步も退かなかつたが、忽然として飛彈は砲壘の傍へなる彈藥庫に命中したので、唯見る、渦巻く一團の黒煙と共に庫は空中に舞ひ、地は鳴動

して、悪氣宇宙を鎮し、烟雲壘を包んで四邊も爲めに昏くなつた。味方の人々は激しい恐怖に襲はれ、一圖にセバストポール落壘の響音だと早合點をしたのである。が躰て濃烟薄れ、悪氣散じ、初めて事實を視るを得た時に不時の災變と知つて、稍々安堵したのであつた。けれど砲壘は悉く壊れ、砲門は破れ、五十に餘る屍は累々として眞黒に靡爛れつゝ、彼方にも此方にも算を亂して倒れて居るので、是れを見ても奈何に其の音響の激しかつたか想像される、何れの軍も皆この不祥の音を聞いたのであるが就中敵は其の音響に答ふるかのやう、哄と歡喜の叫聲を發したのである。其の叫聲を聞くと共に、我が將卒は奮然として慙る中にも無事に殘存して居た砲列に取付き、我れ劣らじと無二無三に發砲した。

他の砲壘にも砲撃の聲は未だに絶えず、般々轟々と鳴り渡つて

居る。中にもマ、ラコフ岩はコロコロツツの弔戦！見よやとはかりに此處を先途と各砲門の火蓋を切つたが、鳥婆玉の夜の幕の下ると共に敵も味方も一時砲火の轟は断絶したのである。けれど夜中さへ砲聲の絶ゆるのはほんの少焉の間である。終日の奮闘に疲勞に堪えぬ者があれば、夜に入つて他の休暇連と交代すると云ふ風に、晝夜共に砲戦の止み間はないのだ。茲に渠のトットレーメンは、終夜まんじりともせず、奈何して破壊された壘を修復しやうか、何處に砲門を据ゑて能いか、何れの邊に土塊を積み上げて壘壁を築かうかと考へながら忠實に檢分を爲た。而して東天將に眞紅に暈りけん頃には、我軍は已に交戦の準備を落なく整へたのである。全九日間といふもの、小止みもなく慘酷たる交戦状態を繼續してなかりに衰ふべき氣色も見えぬ。かくて病院には日一日と患

者の數を増し、又たセバストポールの忠勇なる防禦者を葬るべき  
共同墓地も同様の現象を呈した。この九日間には我が軍は實に四  
萬に近き死傷者を出したのである。

五四



(八) バラクラヴァの陣營

敵軍は遂に戦場に倦みたる景色を現はした。けれども我が意氣  
は益々熾に、敵の砲列が悉く沈黙せるを見ても、一步も假借する  
ことは無い。

敵軍擧つて我が市街を砲撃しつゝある時、堂々たる新手の緞貅  
は、リプランデー大將の指揮の下にセバストポールへ着したので、  
總督メンナコッフ太子は直ちにバラクラヴァに兵を進め其處に屯  
せる聯合軍を蕩掃する事を命せられた。バラクラヴァとは小山に  
圍まれた高處で、其前面には一の谿谷が横つて居る。敵は此の山  
頂に砲壘を設け、優勢なる砲列を布いて居るので、我は其處を攻  
撃せんと企てたのである。然して此の畫策に基いてリプランデー  
は二萬五千の兵を帥る谿谷に向つて進軍した。時しも曉の空は静

五五

に、聯合軍は未だ陣所に夢路を辿る真中、誰も我が軍の前進を氣づく者は無かつた。機こそ可けれ！我が軍は牧を啣んで行進し、山を迂廻して砲門を連び、不意を襲うて、敵陣に闖入したのである。真先に驚かされた英軍の枝隊は、惶惶傳騎を四方の陣營に飛ばして、主力を我に對つて進めやうと企てたけれども、期や遅し、其時は我軍が山頂に達した時で、突貫、突貫、又突貫、見る／＼其處を占領したのである。初度の奇襲に勝利を得た我が軍は轉じて土耳其軍の枝隊を襲撃した。敵も有聲に抵抗を試みたけれど、大厦の傾くを一木の支ふるに由なく、瞬く間に壊走して軍隊の生命とも謂つべき軍旗さへも我が軍の爲めに捕獲されたのである。コザツク騎兵は此の機に乗じて猛烈なる追撃を加へ、したゝか敵兵を斃した。

五六

くも両側の地を支へた爲め、終に我が軍は敵の逆襲に壓倒され、やがて追撃さるゝの悲運に會した。

此より先き、英兵は隊伍を亂して散々に逐逃したが、我が砲兵は、其逃ぐるを的に射撃するので、數百の英兵は立所に斃れたのである。之を見た佛兵は、ひた走りに駈けつけて應援したけれど、これとても我が砲撃の強猛なるに得堪えず、見る／＼總崩れとなつて背走したのである。かくして敵の陣地を我が軍の手に領するや、砲臺は悉く打ち懷し、四邊に散亂して居る砲銃を剩さず我軍に収容した。

此役に、我が軍は夥だしく敵兵を虜にして悉くヒバストポールへ送つて來た。其の俘虜の中には今猶は存命して居る者もある、彼等は我が露國の兵士を評して、一度び戦に臨んでは堅忍不拔、死を見る飯するが如く、勇猛無類、實に生來の戰士かと思ゆるけ

五七



れども、而も戦闘力の盡きた敵兵に對しては此上もなく慈愛の情に富んで居ると語つて居るとか。

収容されたる俘虜等は、今迄は一日だも我等の常食とせる裸麥の黒麵包を食した事がないので、我が兵士は特に彼等の爲めとして白麵包を購つて與へたのである。



(九) インケルマンの戦闘

其後のセバストポールに於ける總ての出来事を擧げんには、なか／＼容易の業でないのみならず、優勢なる敵に對する、我が將卒の死を賭せる冒險談は前と同様である。されば朕は其の中最も主要なる事のみを追想して語り聞かせやう。

ハラゾラヴァの捷利後程なく、更に敵の砲壘を築けるインケルマンの高地を襲撃したが、此役には却つて手痛き逆襲を受けたのである。其の敗軍は、實に戦争中不幸にも誤解したのが原因なので。此役に我が軍は幾度か敵の砲壘を奪ひ、又た其の大軍を撃破して幾度も退却させたけれど、其の度毎に敵は新手を加へ、枝隊を増進し、潮の湧くが如く逆襲して來るので、我が指揮官の多くは死し、又は傷き、將なき兵士等は各自其思ふまゝに進退するの

で自然統一を缺いて、是れが爲めに戦闘力を殲殺したのは餘儀ない次第である。果して我が兵は敵に逆襲され、多少勇氣を沮喪した。されど毫も痺まず、猶も躍進して死力を盡し、色めく軍を盛り飯さうと勤めたのだ。造次顛沛の間も露國軍人の名譽を忘れぬ兵士は腕を限りに奮闘した。ある旗手は砲丸に斃れて全軍の生命とも崇むべき軍旗が、あはや敵手に落ちんとせし瞬間、二人の勇卒身を挺んで、猛火の中に、其旗を無事に奪ひ返した如き美談もある。

永き奮闘に疲勞した我軍隊の、セバストポールへ退却した時には、出陣の花々しさに引かへて、勇猛なる多くの人を其隊伍に見出す事は出来なかつたのである。

ニコラス一世陛下の皇子ニコラス太公と、ミシエル太公とは、此の役に従軍せんとして、都を發足されたが、漸つと交戦の翌日セ

バストポールへ着されたので此の戦陣には加はらず、其後四ヶ月ばかり殺風景なる陣中に滞在して居られた。其の間には、或は砲壘をば巡視し、病院を見舞ひ、朝に夕に只管軍隊の士氣を鼓舞する事に昂めて居られたが、俄然、兩太公はサン、ペテルスブルクへ呼び返された。

雖て兩太公が都へ着かれてから間もなく、ニコラス皇帝は二豎の犯す所となり、遂に起ち給はずなりぬとの報が傳はつた。其處でセバストポールの全營は、新皇帝に對して誓言を捧げたのである。



(一〇) セバストポールの命脈

敵は間断なく我を驚倒せしめ、飛彈のセバストポールへ襲ひ來ぬ日としては無く、敵の接近し來るに連れ、セバストポール市の命脈は益々危態に陥るのである。時としては、飛來する榴彈の路上に爆發して罪なき婦女を斃し、又は家蓋を貫いて火を失せしめ、さしもの大厦宏樓をも、その容赦なき紅の炎に見舞はるゝ始末。斯くて路行く人も次第に滅じ、繁華の大路も寂れ果て、凄氣四邊を罩め、陰々として住む人もあらずと思はるゝばかりの光景となつた。初めの程は、彼處の隅此處の角と、安全な所へ市場を移して居つたけれど、今は其さへも無く、安全に身を托すべき隠家としては、何處にも求め得られぬので、市民は止むを得ざる要件か、又は負傷者を救ふの外は、只家内のみ引籠つて居るのである。

大勢既に斯うであるから、我が有司は城下の住民等に、須らく此の危険の地を退きて身を全ふすべしと諭告し、國庫は貧困者に救助金を賜はりて家を鎖さしめ、偏にセバストポールを撤去させやうとしたけれど、日々に悲境に沈淪し行くセバストポールを見捨て、己が身の安全を願ふ如き者はいと稀であつた。即ち住民の多数は敵の包圍を受けたる危険の市街に留り、城と共に運命に支配されんと殊勝の決心を固めて居るのであつた。

其の後、聞くも悲惨の大激戦があつたけれども、永の疲勞を慰めん爲め、數日間休戦せんと約束が調うたので、敵も味方も國旗を掲げ、其の旗の陣營の上に翻つて居る間は、世は平和の昔に販つて、日毎夜毎、殷々として天地の静溢を破つた砲聲も止み、至る處に樂しき談笑が聞えるやうになつた。此の休戦中は、今迄の様に、死者又たは傷者を出して、天地の神聖を汚すやうな事と

てはなく、憤激残忍の影は跡なく消へ去つたのである。  
 互に鎧を削りつゝ、奮闘力戦した敵味方なるにも拘はらず、我が兵は友情を盡くして佛兵を歡待し、彼等の勇敢なる行爲を敬ひ、且つ彼等の温厚賑るゝばかりの情誼を欣んで居る。我が兵士は慰勞のじるしにとて彼からパイプや煙草の類を受ければ、我からも種々の物品を贈り、敵味方の觀念を抛棄して互に陸み合つて居つた。されど今や、已に業に自旗は悉く撤去され、佛國兵は我れに向つて優しき別離を告げて其陣營に飯り、茲に又も彼我が砲撃は開始された。  
 市の南の方で斃れた人々は、何れも其の海邊に運ばれて推く積み上げられ、更らに解にて北方に移され、大なる墓地に埋葬されるのである。  
 此等の將卒等は、假令其身は死んでも尙ほセバストポールの地

に止まり、永劫其處を守護して居るのであらう。  
 墓地には大きな穴を穿つてある。而して何の穴にも五十人以上の屍を投げ入れ、土を覆うた上には十字形の木標を建て、幾多の僧侶は絶えず儀式を行つゝ、邦家の爲めに斃れたる人々の千古不滅の勳功を頌した。此の墳墓を人は皆  
 「同胞の墓」と呼んで、休暇を得た兵士等は屢々参拜して戦友の英魂を慰めて居る。

(一一) 副提督イストミンの戦死

イストミン將軍も亦、終に死の神の來襲を免れる事が出来なかつた。陣中生活に多大の疲勞を感じながら、毫も衝天の意氣を損せざる勇武の振舞と、神出鬼没の用兵の蒐引とは、彼我共に賞讃の辭を惜まなかつたとか、實にやコルニロツフ提督陣没後、彼は「コルニロツフの岩」とまで名を附せられたマラコフ岩の主腦と仰がれ、保護者と貴ばれて居つたのである。五ヶ月間の永き、彼は唯の一度も軍服を脱いで休養を執つた事とはなく、晝夜開を偷んで束の間の眠をとるばかり。いざ戦闘となれば、常に衆に先んじて突進し、退却には常に人の殿後に立つのである。其の炯々たる熱の如き眼光は、四邊の風物を隈なく射て、絶えずマラコフ岩の圏内に耀を落して居るのだ。彼は永き歲月己が割棄して居た船

艦を愛せし心を以て、其のマラコフ岩を愛し、且つ勇武なる騎士の、その忠實なる駿馬を撫馴する如く、大海の狂瀾怒濤を切り開いたのである。頃しも春陽三月の初めつ方、イストミンは所用ありて己が砲壘の隔たる一端に行きての歸途、誰も溝渠を辿り行くべきを、彼は平然として土堤の上加へも防禦線の邊を活歩して居つたのであつた。

「溝渠へ！、閣下、とく溝渠へ下られよ。」

隨行の従卒は喚驚しつゝ、

「堤上を辿り給ふは頗る危険の事なり。」

と叫んだ。されど危険に遭遇して逡巡し、又遁逃するはイストミンの稟性ではないのである。

「何ぞ心を勞するの迂なるぞ、飛來の彈丸を防遏するは何人も成

し能はざる事ならずや。」  
 と答へて尙ほ堤上を辿つて居つた。時に閃電燦として光を引くと思ふ途端、敵弾飛んで副提督イストミンの頭を浚らつて行つたのだ。かくて名譽の亡骸はコルニコフ提督の傍に葬られたのだが、ナキモツ提督は、色を失つて副提督の死を悲み、自ら其の棺を擔つて墓地に運んだのである。ナキモツは多年苦樂を共にした其の親友の墳墓の上に、涙と共に最後の土塊の一握を置いて悄然とさし俯いた。イストミンの老母と令妹とは、我を忘れて墳墓の上に泣き俯し、他事の見る目もいたはしき程掻き口説たのであつた。

三月も終りに近い頃である。此日は神聖なる金曜日、祝日であるので、人々は各寺院の内外に立錫の地もない程に群がり詣てゐる。即ち此等の決死の人々は、胸に溫柔を湛へて救世主の受け給

ふ苦業の説教に耳を傾け、偏に天帝の救護を祈つて居るのである。折しも、敵の打出す砲聲は俄然轟き渡つた。彈丸は虚空に唸りを立てて寺院を掠めて飛んで行くので、其の轟々たる音は祈禱の聲を奪ふ光景に、氣弱の婦女子は周章狼狽逃げ出しはしたけれど、有樂に神の祈は絶えなかつた。

一秒は一秒と死期に近くと共に、我がセバストポールの人々は一入殿に神の祭を舉行する、一所に會合した群集は、共に齋日の終りを祀り、婦女子は粉黛を粧ひ、盛装を凝し、將校は威めしき軍服を纏ひ、砲臺は秩序正しく整頓し且つ清淨を極めて居る。妻女は白麵包や供物の卵子を兵士に贈り、少女は園庭に集つて樂しき遊に耽つて居る。而して兵士輩は砲臺の傍に圓座しつゝ、投錢の戯に恐ろしい戦争を知らぬかのやう、愉快さうに嘯し歌つて居るので。

其の時一人の機智に富んだる兵士は、戦友の笑ひ興して遊戯に時を費やす間に、此の祭日の祝意を敵にも知らせやうと、種々考案を巡らした結果、空虚の榴弾を取出して之れを赤色に染め、祭日の卵の代りなりと、砲に装填して英兵の陣營へ贈つた。此興味ある事の爲め、人々はいやが上に大祭日の喜びを重ねたのみならず、敵の砲撃も瞬間に静まつたのである。

(一一) 再度の砲撃

さらば今宵のみは、安らかに眠に就かれやうと、心竊に頼んで居た衆人の望も空となつた。即ち夜の漸くに明け初めて、東天の少しく紫立つた頃、セバストポールは又も手痛き攻撃に騒がされた。各方面に砲聲轟き渡つて、彈丸は雨の如く、硝煙は渦巻き、茲に再び砲撃は開始せられたので。

時に隣は驚々と吹き荒み、篠つくばかりの雨さへ降り出で、天地暗憺、さなきだに凄惨たる戦場の光景に、一入の鬼氣を添へた。住民は恐懼戦慄いて生きたる心地もなく、阿鼻叫喚の巷を避けやうと北岸の營内に隠れ場を探し、或者は心細くも一葉の船を逆巻く荒波に漂はせつゝ、入江をば渡らうとし、或者は遙々遠き岬頭を迂回して逃れやうとし、可憐の子を抱きしむる女、病に腦め

る老父を脊負ひ來れる妙齡の少女、さては大路の隅に憩ひつゝ、號泣して居る群を、砲火の閃はたい物凄く照らすのである。街衢は至る處混亂を極めて、乗馬の士官は絶えず往來し、多くの小隊は道に溢れんばかり、軍用品を満載した大小の輜重車は急しげの軋を立て、砲壘に進發する。小車に収容された負傷兵は、苦痛の呻吟と共に病院へと道を急いで居る。暴風の物凄まじい吼は砲丸爆發の響と混じり、降來る大雨の濁流は鮮血の川と合し、身の毛も彌立つ有様である。

砲撃は殆んど一週間の長時日に涉つた。苦痛の叫と悲鳴の呻吟は、骨を刻む如き感を齎らして病院の外に洩れ、晝間の戦闘に氣力も消沈し盡した我兵士等は、半ば死ぬるが如く疲れに勞れた体を、砲壘の内に横へて居る。ともすれば、咫尺も辨せぬ闇の直夜中に容赦なく敵の砲丸が飛び來つて、一九の下、砲壘の修繕に余

念ない多くの人夫を斃去るのである。憊る時には他の補缺の者は速に死の仕事場に送られて、重ねて敵弾の飛來するまで仕事を續けて居るのだ。

されば負傷者の數は漸次増加する。迎もセバストボール丈では収容する事が出来なくなつた。是非一時は隣村へ運ばねばならぬ程になつたのであるが、人手が少くない爲に、其企も歩々しく抄取らなかつた。何れの方面を問はず人手の少いのに夥しい困難を感じて居るのは言語に盡し難い程である。

此包圍攻撃の最中、百三十七人の特志看護婦は、遙々クリミヤに來着した。天女の降り給ふかと思はるゝばかりの看護婦等は、己が慈善の尊き業に、晝夜の分ちなく身を粉に碎いて盡して居る。彼等は敵味方の負傷兵の混つてゐる間に立ち入りて、敵味方といふ忌はしい觀念を捨て、美しい博愛の心から互に兄弟の如く、



又た姉妹のやうに勞つて居る。

我負傷兵は彼の女の一人に向つて、

「我が善良なる賢妹よ。敢て予の爲めに手足を勞する勿れ。希くは幸に彼れ佛人の爲めに盡されよ。彼れ等は見も知らぬ他國に捕はれの身と成りし可憐の者なれば。」

かくて苟且にも倦みたる色を表はさない看護婦は、彼床此席と歩を移しては勞はりつゝ、苟も休息を得やうとはせず、また安眠を求めんともなさで眞心こめて任務を盡くして居る。只管に負傷者の心を慰めて元氣を恢復させやうと盡して居るものもあれば、中には死に類せる人の心に運命と信仰とを説いて祈禱を捧げ、安らかに永眠さしやうと助めて居るものもある。又他方にては、外科醫の助手となつて手術の方を助け、器械、綑帶、綿撤糸、淨水等を整へて居るものもあるのだ。手術室とて定められたる一室に

は絶えず醫員が詰め切つて、其室の片隅の大きな容器には、いつも切斷された手足が充ち満ちて居る。

砲撃の永く繼續される折には、時として日に七百名程の手術を施す事さへある。其も輕傷者を除いての重傷者ばかりとは………即ち輕傷の者を省る暇がないからなので。

將官達も彈片で負傷し、或は銃鎗を手脚に被る如きは些細の事である。其都度之を見ては、綑帶を施す爲めに野戰病院へ行かん事を勧める者があつても、彼等は聲の下に軽く答へるのだ。

「かばかりの負傷何かあらん、何ぞ任務を缺くに値ひせんや。些少の苦痛を感じるに過ぎざれば、日を経て快癒すべけん。我等は病者にあらざるが故に茲に留るは至當の事なり。」

(一三) 新提督、ホール、ステバノウイツチ、

ナキモツフ將軍

新任の提督ナキモツフはセバストポールの知事に任せられて、嘗て艦隊に於て受けたやうに、あらゆる人から多大の頌讚と幾多の親愛とを表せられた。而して此勇將を慕ふの餘り、誰れもが一見して直ぐにナキモツフたる事を知るやうになり、市場の婦女子等も、彼に逢へば微笑を浮べて叩頭する程である。けれど誰でも此多大の尊敬を拂へるナキモツフの前で、何故か脱帽しないのである。と云ふのは謙讓を以て任ずる新提督は、過分の尊敬を受けるのを、却つて心苦しう思はうてゐるからなので

「君！」

と砲臺の方へ小股に拾ひ行く一人の水兵は、ナキモツフ將軍の姿

を遠くより打見やりつゝ、其同僚に向ひ

「見よ、我が父は來れり。彼處に、彼處に、」

實に、彼等はナキモツフ提督を父とも思はうて居るので。ナキモツフも亦彼等を子の如くに慈しみ、親しく話を交えて彼等を慰めるのである。

而して兵士等も此の新提督と話をする時には、嘗て一度も、ホールナキモツフと、其の名を呼んだ事はない。戦友の間に於て彼れ提督の噂をする時でも、ナキメンユー（可愛きナキモツフの意）と呼び、武勇絶倫の此新提督の生命の有らん限は、セバストポールは決して陥落されまじと、固く心に信じて居るのである。併しながら婦女子の仲間は、遂に此の新提督に向つて不満の囁を洩らすに至つた。その理由は外でもない、孤城落日の非運に陥つてゐるセバストポールは、日々に危険を増すのみである。されば其の

危険を案じたナキモツフは、例令甚だ理由があるにしても、誓つて此危険なる南岸を退却し、當時尙は敵弾の飛來せぬ北岸に避難せよと、婦女子に向つて嚴命を下したからで。

命令の斯程峻厳であるにも拘はらず、ナキモツフ提督の言ふが儘に南岸より北岸に移つた者は甚だ稀であつた。其後とても前同様路上で婦人にも出會するし、砲臺ですら絶えず水兵等の妻女の姿を見た位であるから。

(一四)

アレキサンドロウイツナ、  
クルーレフ大將

クルーレフ大將は、ナキモツフ提督と同じく、兵士と人民とに信任と畏敬とを受けて居つた。其不撓の精神は、危険を恐れず、死を物とせず、常に笑を含んで死地に趣くのだ。一日の事、砲戰のまさに關なる時、硝煙の隙々たる中を蘆毛の駒に跨りつゝマラコフ岩指して馳走する長幹黒髪の一騎があつた。衆は皆一瞥して、此の騎士こそクルーレフ將軍である事を知つたので。

「下馬し給へ、疾く下馬し給へ。」

人々は聲を揃へて、

「敵弾を避け給へ、何たる危険ぞ！、今にも閣下を撃ち倒さんとするに非らずや。」

立つても、部下は皆心強いと信じて居るからで。

と熱心に彼を促した。

此時、遅し一弾虚空を劈き、凄まじい吼哮を立て、彼の眼前に數歩の所へ落下して轟然爆烈した。其硝煙の尙濛々たる中より、クルーレフは傲然として現れつゝ、

「かゝる彈丸！、焉んぞ余に命中し得べき。」

かくて悠然として静々と馬を進めて居つた。其後とて彈丸の彼の頭上を飛過せし事は實に幾回であるか、殆んど數へ切れぬ程であつたけれど、クルーレフは其轟々たる硝煙の渦巻く中を、猶且心静に馬を進めて居た。這麼事からしても兵士等はクルーレフには天の冥助があつて、敵の彈丸も決して彼には命中しないのだと信じて居るので、クルーレフが陣頭に立ち、部下を指揮して砲火の中に衝き進まうものなら、一同の兵士は喜び勇んで敵に當るのが例である。即ち彼を隊長と仰いで居れば、如何なる猛火の中に

(一五) 前塞の退却

嘗て初度の包圍攻撃を受けてから以來、我が軍の力は徒に聯合軍の動作にのみ誘致せられて、他に發展も爲さず、毎に其が爲めに率制されて居つたのである。けれど過ぐる如月の末の方、我司令官は瞑瞶暗膽たる夜を利用して、一隊の枝隊を、遙か敵に接近せる戦線に突進させて、時しもセバストポール防禦の主點たる、兀たるマラコフの丘前、距離五百米突の處に、一個の方形砦を建築する事を命ぜられた。即ち其處へ砦を構えるのは、出で、突撃を試みるにも便利であるし、又砦の壘深によりて容易に敵の前進をも遮断出来るからである。

敵の知らぬ間に仕事は迅速に進捗つた。而して曉方近き頃には地軸を踏んで天に聳ゆる嚴めしき方形砦は忽然と築れて居たので

ある。是れを望見した聯合軍の驚愕は如何ばかり、天より降つたが、地より湧いたか、吃驚する外に重ねて怪訝の念に堪えなかつたのであらう。

其翌日、カムチャスキ聯隊は前夜の工事を續けて、辛くも竣工した點燈頃、佛國兵は其頂上目蒐けて發砲したので、我聯隊には二十餘人の死傷者を出した。それ故に最初殊功を樹てた此等殉難者に因んで、此の壘をカムチャスキの砲壘と命名し、直ちに砲門を整へて敵の襲撃に備へた。更に又カムチャスキ砦の左側に、二箇の砲壘を築き、カムチャスキと相應じて敵の溝渠に當らしめた。而して其の壘の名は、そを構成せる聯隊名に因んでセレンギンスキー、及び、ウオリンスキーと命けたのである。徳

る上にも我はまた城市を圍饒する砲壘の前面を撰んで更らに第二の砲壘を築造したので、敵はこの工事を防害せうと企てたのか、

激しい襲撃を試みたけれど、其都度手を空くして退去するのが例であつた。是に引更へて、我軍は大膽なる突撃によりて、カムナヤツカ(兵士等はかく呼稱して居るので)を掩護したのは、實に幾度であつたか。

カムナヤツカはかくて終に、聯合軍の羨望禁する能はざる好餌となつた。時は五月の下旬、敵は又も砲撃を開始し、爰にセバストポールは硝煙彈雨の間に、復もや敵に見ゆるのである。我軍の此の擾亂に陥れるに乗じて、雲霞の如き密集部隊は、突出せる我新砲壘へ肉薄し來つた。折も折、時も時、生憎我軍の防備疎に、其處には唯だ僅の守備兵が屯して居つたのみ、さしもの堅壘カムナヤツカも今や風前の灯、將に敵兵に蹂躪されようとして居る、のみならず佛國軍はマラコフ砦に對し死を期して突撃し來つたのだ。されどマラコフ砦には名將クルーレフ在り、部隊を率ゐて必死に

逆撃したので、有業の敵も支え切れず、更に主力を轉じてカムナヤツカに當らうとしたが或は我が銃鎗の前に斃れ、或は捕虜となり見る／＼、壊走したのである。折しも一騎の傳令走來つて、敵は我がウオリンスキー、及び、セレンギンスキーの二壘を奪取したと報告したので、クルーレフは無念の切齒しつゝ、自身馬を馳せて救助に趨いたが、既に遅し、敵兵益々密集して其數四萬に達し、我が一隊は枕を並べて名譽の戦死を遂げたばかりか、勇將ナモウフエーフすらも空しく銃殺の的となつたのである。其時又しも傳令使はカムナヤツカ砲壘陥落の悲報を齎したのであつた。時に夕暮の雲低く垂れて、刻一刻に迫來る夜の色は次第に此の悲惨なる戦場を被ひ、黑暗々の闇の色に封じたので、遺憾ながら爰は我軍は退却せねばならぬ。遂に一步を敵に譲つたのである。前塞を失なうて無念やる方なきクルーレフは、黎明を期して一

舉に敵を攻撃すべきを下知し、準備おさし、意りなく是の優力な  
 る敵を只だ一擧に蕩掃して屈辱の恥を濯がんものと腕を撫しつゝ、  
 只管時の至るを待つて居た。けれど我司令官は此の勇壯なる企を  
 許さなかつたのである。其理由は、よし彼の壘を奪ひ歸したとて  
 も到底それを堅固に保守する事は出来なひと思唯したからで、要す  
 るに無用の勞力を惜んだのであつた。が併し此戦に於ける打撃は  
 恰も百雷の一時に落下たかのやう、いたく我が獅貅を落膽させた。  
 それさへあるに昨日迄は幾度も、殆んど敵の知れぬ程敵軍を  
 惱した砲門さへ、今は我に向つて火蓋を切て、火花を浴せる口惜  
 さしかて、加へてサルデニユ一政府は、情無くも我の敵たる聯合軍  
 に力を併せられたれば、敵は益々勢を得て其兵力は既に十六萬を越え  
 た。されば我が軍の任務は、いやが上にも困難を來たして、此の  
 窮餘の一ヶ月は一年にも相當する、實に一日千秋の思であつた。

今し夏の初、炎ゆるらんやらの白晝の熱さも夜と成れば空澄渡り、  
 そよ吹く風の涼しさ。晝間の任務に勞かれた人々も此深い大氣に  
 打たれて心地能く憩ふべき時であるのに、何事ぞセバストボール  
 の防禦者のみは已に業にいつの程よりか安息と云ふものを忘れて  
 了うたのであつた。防禦に離暇もない將卒等は他隊の兵士が砲側  
 に立つて、敵の砲火に報ひて居る間に、僅に辛うじて休息と睡眠  
 とを得るに過ぎなかつた。中にも或る兵士の如きは頃刻進る夢路  
 の隙にも、砲壘の恢復を忘れ兼ね、哨舎内の聖主の畫像の前に跪  
 いて絶えず熱誠の祈禱を捧げて居たのである。

(一六) 第三回の砲撃

夜の深閑と更け渡るに連れて、敵の砲撃は愈々激しく聞えて来た。全廿四時間、絶えず砲聲は轟いて、六月六日の夜もほのくと明け渡るや、鼓聲響々と、今や十六萬の敵の大軍は潮の寄するが如く突進して来たのである。

佛蘭西兵は第一第二の砲壘とマラコフの丘に躍進した。灣内に遊戈して居た我艦隊は、時を移さず此の敵に向つて猛烈なる砲撃を加へたので、爆烈する砲丸は絶えず般々と轟き、幾百條の火柱は錯又して虚空の暗を彩りつゝ飛び交ふ。

更に又た他の一隊の佛兵は猛り立つてマエルダエの砲壘に突進し、雨の如く降来る砲火を物ともせず、多くの死傷者も捨て、願みず、尙ほも前にくと進撃する。燃たる火花の糸は渦巻さくづ

る、黒烟を纏ひ、到る處の砲口は彈丸の雨を降らして、驚々般々耳も聳するばかり、座ろに心臓を寒からしめたが、俄然佛兵は此の轟を破つて哄と凱歌を擧げ、丘後の斜面に横る一帯の隘谷を占領したので、その砲壘を守備して居つた我が大隊は最早や及向ふ力も失せて、あはや防備の力も將に盡さんする間一髪、かくと見たクルーレフ將軍は、蘆毛の駒に高く一鞭を加へて、

疾風の如く馳來り、

「我兵士よ止め！ 應援の兵は到着せり。」

と大聲叱呼した。兼ねて聞き慣れたる最愛の大將の聲に、四途路もどろに壊走せんとする兵士は覺えず踏み止つた。時に一將ありて、凜たる聲。

「兵士等よ、前に！前に！」

と絶叫した。さなきだにクルーレフ將軍の應援に勇氣を恢復し



た兵士は口々に、

「進め！ 進め！」

と繰り返して、一隊茲に勇躍として、恰も飛鳥の如くマニエルヴエの砲壘に逆撃した。時しも一隊の新手も殺到したので。

クルーレフは更に一段聲高に、

「續け、我が勇士！」

と呼はりつゝ、駿馬を先陣に躍らせつ突進した。我劣らじと續いて全隊進撃して見る／＼マラコフ丘の斜面に散開し、幾多の將校は玉散る劍を抜きつれて、身を陣頭に立て、叱咤指揮して居るのである、佛兵は早くも占領したる家屋に立籠り、マラコフ砦に對して、恣を楯に頑強に抵抗したが、我が砲壘の兵士は敢て一步も動かす火災と腥血との中に突立ち、砲門を開いて其の家屋を破壊する。此時砲壘の側に立つて部隊を指揮する一人の勇將があつた

が、小銃で十數回も狙撃されたにも係はらず、彼は益々朗な聲で、

「強剛なれ！ 我兵士よ！」

と強く／＼叱呼して居つた。けれども頃刻の後窓から飛び來つた敵の一弾に、あたら勇將も遂に挫と打斃れて、流るゝ鮮血は韓紅に土を染めた。

一將直ちに之れに代つて指揮の任を執つたが、狙撃の銃火は依然として窓に閃き、其の危き事！ともすれば狙撃手の下に命を殞さねばならぬ。されど幸なる哉、此時我がクルーレフは部下の勇卒を帥ゐて、敵の家屋に押し寄せ、戸を破り家上に攀ち、暖間にさしもの大敵を壊走させたのであつた。是に於て敵は新手を加へて再び殺到したが、再び撃退された。

既にして彼我混亂の大接戦、銃劍鞘を脱して晃々と輝く程に、奮闘は一騎撃となり、忽ちにして佛軍色めき、土砂の壊るゝかのや

う、一部隊より退却を始めたのを、我軍は透さず追撃を加へた爲め、敵兵の死傷するもの多く、終に脆くも背後を見せて散々に敗走した。

「萬歳！」の祝聲は戦列より戦列に、更に戦列より戦列に、復た戦列に、勝利は全戦線の我軍の手に飯したのである。これより先き、我艦隊も砲火を開始し、陸兵は既たるマラコフの丘上、群れ来る佛兵を撃退せる間に、英兵は隙さず第三砲壘に攻め寄せた。けれど忽ちに我が猛烈なる砲火の爲めに、さしもの突撃隊も、列を亂して退却したのであつたが。又もや我が砲壘より、退路を狙撃されたので、數百の死傷者を増加した。

かく大捷を得たるにも係はらず、セバストポールは尙ほ硝煙塵々たる濃雲に鎖されて、恰も黒紗に包まれたる如き光景であるのだ。

處々に燦々砲戦の火花も薄らぎ、只だ時々爆烈の轟を立てるばかり。突撃せる敵は何等の功を収めず、悉く戦線より撃退されたのである。既にして彼我共に白旗を立て、世は平和の休戦となつた。さらば、敵味方共に混淆し、彼れ血涙を呑めば我愁眉を颯め、互に傷者死者を収容し、慈善の婦女子は血腥さ草踏み分け、水を與へて傷者を勞はるに餘念なく、聯合軍は一車又一車、限りなき程屍を車に積んで運んで居る。而して我軍も亦た此の勝利に高い價を拂うたので、野戦病院は言はずもあれ、病院と名のつくあらゆる病院は最早や一臺も空いた臥床を殘さぬ。墓地は日々に擴められるのであつた。

されど勝利は確かに我が軍に飯したのである。セバストポールは歡喜の聲に充たされて、疲勞れ果てた人の顔も何となく喜の光澤を添へ、かばかりの喜ばしい日に逢うた事がないと思ふのも無

理のない事である。將士等は此の奔闘で敵の猛進突撃に對して痛  
快なる打撃を加へたとて、眼前咫尺に迫りくる危険も打忘れて欣  
喜雀躍し、負傷者は己が深創の苦痛を忘れて陰鬱なる病院の隅ま  
でも歡喜の聲に満たされて居る。神に名譽の戦捷を稱ふべく、寺  
院に詣づる群衆は人の山を築いた。然あれ、恐るべき危難は此時  
いとも間近くに迫つて居るのである。

(一七) 提督ナキモツフ將軍の戦死

六月の終りに、唯だならぬ災厄がセバストポールを襲うたのであ  
る。城内の人々は、ひた走りに街衢に集まり、互に問ひつ尋ねつ、  
懸念の色を現はして、愁眉を顰め、何か思ひ當る節々にいたく心  
を動かして居る。此の群衆は一時間前にナキモツフ將軍が、栗毛  
の駒に打跨り、其の幕僚を従へてマラコフ丘の方に進軍したのを  
見た。然るに其後幾何もなく主なき乗馬は、鞍重たげに悄々と率  
き飯られ、且つ其の幕僚は全速力もて馬を各方面に飛ばし何か唯  
ならぬ事件の起つた氣勢。砲壘からは幾多の水兵が駈けて来て、  
人々にナキモツフの噂を尋ねて居たが、程なく驚くべき凶報は落  
雷の如く全市に傳つた。「將軍ナキモツフは負傷せり。」提督ナキモ  
ツフは戦死せり。」と人々は唯夢かとはかり疑うた。

然し噂は事實であつた。ナキモツフは傷けられ、ナキモツフは死んだのである。嗚呼ナキモツフ！此日！此時！不幸なるマラコフの丘上に、絶世の偉人は斃れたのだ！提督は各砲臺の巡視を了り、やがて敵壘を一瞥すべく壘胸外に進み出たので、壘の司令官は其の冒險なる行爲を危く思ひ、速かに此の危険な場所から立ち去らしめやうとして、偏にマラコフの寺院の晩拜の式に列せられん事を勤め、且つ式は既に初つた由をも云ひ添へて、只管提督の決心を翻させやうとしたのであつたけれど、ナキモツフは儼乎として、其の位置より小搖きだもせで、

「予は程なく列席せん、希くは君先づ行きて予を待たれよ。」

答も敢へず、提督ナキモツフは挫と倒れた。敵弾の破片、提督の顛顛骨を打ち貫いた爲めに！

やがてナキモツフは彈着點の外なる北岸に送られた。醫師は及

ばん限りの力を盡し幕僚等は唯只涕に咽んだ。かくと知つた人々は急いでナキモツフの臥して居るバラツクの周圍に詰め寄せ、息を殺ろして唯だ愁嘆の内、一夜を徹した。かくて尙ほ心痛と擾亂の間に一夜を明したが、翌曉うたてや寺院の鐘殿々として無常の風に哀音を漂はせ、セバストポールの住民にシノープの勇將終に再び起たざるの旨を傳へた。

市には悲哀の色滿ち、海には彼の音凄く、哀惜に沈める人々、我れも我れもと埠頭に走せ寄り、各脱帽して空に十字の聖號を畫ける折柄、一隻の大なる解は海の方に浮び出でたり。そが船には黒衣の僧侶一人、十字架を捧げて立ち、船足緩く南岸なるナキモツフの墳墓の方へ漕かれ近く。

やがて解は棧橋に停り、その靈柩は嘗てシノープ戦勝の日、彼が指揮せし艦旗もて包まれ、靜肅に彼の家に送られた。衛兵及び

市民の面々は皆て彼れ等を保護し、彼等をして敬愛措く能はざらしめたる、此の勇將の埋骨式に列し、萬解の涙と共に永訣の禮を盡さん希ひ、老翁、婦女、水兵等は一團又た一團、群を成して悲雲翼々たるナキモツの質素なる住宅の門前に集つた。

棺は三旒の軍艦旗もて蔽はれ、儀仗の水兵が之を守護した。かくて葬式の日は來たのである。あらゆるセバストポールの住民は人波を打つて悲哀なる式に會し、敵も有聲に砲撃を中止して我に尊敬の意を表し、我が勇將の葬儀に對して悼惜の情を示して居るのは敵ながらも禮を知れる心も押し計られて、いとど心嬉しく感ぜられた。

斯くて司令長官、高級の將官等の船を出づるや、轟然たる用砲我が各艦に轟き、葬儀の列は肅々として陸海軍二列の間に進み行く。各聯隊旗は黒沙もて包まれ、軍艦旗は低く卸された。サンミ

この島の寺院では、既に露國諸名將の墳墓の傍に、此の勇將の墓地を設けてあるのだ。

葬送の儀式は濟み、水兵は二人づゝ血涙滂沱たる顔を拭ひも敢へず、皆て父と敬うた偉人の靈柩に告別の辭を捧げ終つた。かくてナキモツの亡骸は、常暗の墳墓の内へ収められたのである。

(一八) 第四回の砲撃

セバストポールは益々哀なる姿となつた。就中水兵等は太く力を落し、時には狂氣の如く敵に對して小銃砲を撃つのが習慣となつた。而して砲壘に通例の修理を施す外、尙ほ新に工事を起すのみならず、南北兩岬の連絡をとらんとて、セバストポールの灣に棧橋を架ける事にした。

敵はあらゆる方略を盡くして、工事の進行を妨げたれど、其の甲斐もなく工事は着々捗つて、一百有餘の人々は絶えず勞役を執つて居つたのだ。見よ！日々各方面より飛來する敵の彈數、實に五百箇以上に達せぬ日とは無かつたけれど、二露里の長橋は約一ヶ月を経て竣功して、聖母昇天祭の日には、滞なく開通式を舉行したのである。

(一九) 第五回の砲撃

凶運は絶えず此の殉難の衝に當れる市城に襲來し、幾十百の街上には生ある靈なく、砲彈は風に散る樹の葉のやう、縦横に飛び交ひ、死の神は破壘の上に豊なる秋波をなし、我が軍需品は早やも缺乏を告げた。……萬斷一縷の希望！それすら今は毎日に消え行くのである。されど我軍の勇氣と信仰とは毫末も減損せず、將卒は砲壘の上に死するを甘んじ、城内の民衆は覺悟深く寺院に祈禱を捧げて居る。

然るに一日の事、幾多の人は、サン、ミンニルの寺院に集つて彌撒を擧げつゝありし折柄、俄然一彈屋を貫いて飛來し、地下室なる神庫の内に爆發した、壁は壊れて許多くの聖像を倒し、祈禱に餘念ない人を殺傷したので、此後は寺院の祭壇を兵營内の安全

な場所に移して、かゝる災厄を避けしめる事に決した。砲臺いとど激しかりしにも拘らず、我が教祖奉遷の日、法服を纏へる僧侶は寺院を出て、背て設けの祭殿に、聖餐、十字架、聖像及び貴重器具を嚴に運んだ。彼等の頭上には旌旗翻り、天地に轟く砲丸の大音響の中を死を恐れぬ基督の兵士等は信仰に充ち満ちたる心もて、少しも恐れず肅々として其の歩を進め行けば、幾群の民は脆きつゝ、鹵簿を送迎し、耳を故て、崇高なる神の歌を聞いて居る。時に又もや敵彈虚空に飛來したので………全列足を停めて其の爆發するのを待つて居つた。………瞬間の後弾は落下して、爆發し、莊嚴なる行列は再び進行を續け、神の讚美歌は聲嚴に再び唱へられた。

殊勝なる哉、我が僧侶は各自に苦痛と憂慮とを分擔して、絶えず砲臺を巡視し、運命を天に任せつゝ、從容として身を危地に陥

れながら、何等の恐怖を懐かずに、瀕死の人々の斷末間を迎へ、唯々として彼等の爲めに天國の恵を授けて居る。それが温和にして且愛情の溢れたる言葉、且つ基督教徒としての美德はいたく軍隊の精神を鼓舞させたのであつた。就中僧侶の一人、ベンヂヤミン教父の如きは、包圍の攻撃を受けつゝあるに拘らず、彼の手にて聖餐を授けたるもの、無量二千餘人の多きに達したと語傳へられる。彼等が僧侶としての悲惨なる埋葬の任務は、絶ゆる隙なく行はれ、日曜又は祭日等の、砲聲市に轟かぬ日には、各砲臺の壘上に殉難者の英魂を吊ふので。

此の激しき間斷なき闘争は、今や十一月の永きに渡り、セバストポールの臨終も愈々間近くなつたのである。敵の溝渠は日に其の歩を進めて、既に市街より僅々數米突の近距離に達した。而して我が忠勇なる砲臺の防禦者は、困難なる工事と戦闘とで、疲

勞に疲勞を加へ、衰弱に衰弱を重ねたけれど、この忘るべからざる  
 城市を敵手に渡さんとの考は、如恁永日の憂苦に逢ひながらも、  
 夢にだも思ひ浮べた事はないのである。けれど我が司令官等はか  
 かる悲運に驅るゝからは、片々たる此一孤壘を支ふる事は最早不可  
 能の事だと観破して居つたのであつた。死力を傾け盡し、無数の  
 人傑を犠牲に供しつゝ、絶ゆる間なく破壊せる砲壘の修繕に努め  
 て居るけれど、工事は一向捗らぬのみか、彼方此方と幾度も土塊  
 を運んだ爲に、今や粉粹して柔かな粉土となつて終ひ、かて、加  
 へて時期が盛夏の事であるから、大地に干乾びて、骨肉を愛まな  
 い勞役の巧も、只だ一發の敵弾に奪ひ去られるので。  
 マラコフ砦は、他の砲壘よりも一層困難の境遇に陥つて居るの  
 であつた。此處は昔の堂塔に凭り其の側に築造されたので、他の  
 砲壘よりは敵に向つて突出して居るのである。それ故に敵の砲撃

の目標になり易く、今や堂塔も半破壊され、全壘既に壊滅せんと  
 爲るので、其上砲門は毀損され、銃剣は折れ、彈藥盡き、今や發  
 砲數を算へねばならぬ有様と成つた。加之、兵員は日々に減少す  
 るのである。

敵は此處を看破してか毫末の猶豫せず殺到し、遂に第六回の攻  
 撃、乃ち最後の砲撃を開始した。



(二〇) 第六回の砲撃

八月二十四日、残んの月の影薄れて、將に西嶺に落なんとして未だ落ちず、旭日東天に昇らんとして未だ昇らず、寥落たる曉の紺碧の空に黒雲を漂す時、此関家を破つて凄まじくも燦然たる砲聲が轟いたのである。時経て砲撃益々盛んに、火焰の花は蒼穹に散亂れ、爆發の音響、空間の鳴嘯、ともすれば土塊、瓦礫、死屍は四方八面に飛散し、硝煙の暗は宇宙を包んで、爲めに天日の光も薄らぐかと疑はれる。

敵の一弾我が艦に命中し、忽ち烈々たる火災を起したが、この一塊の火焰は波濤を超て市街を愁めたので、忽ちにして陸上には盛なる炎を揚げた。地上に爆發する硝薬の火塊は、風に散る糞穢の如く、砲門を空際に舞はしめて粉碎させ、家屋は鳴動して破れ

セバストポール市の四側は恐ろしい悪煙と猛火の裡に葬られたのである。

恰も奮怒せるかの如き大砲は小止だもなく轟渡り、時折彈藥を充填せる樽を投げられるので、それが爆發すると共に土砂を揚げ、死傷者を増し、常に人々の胸を爽快ならしめた大氣は火烟に充ちて戦員の胸を焼く始末、地に滴るは白露の清き濕に非ず、腥氣人を襲ふ鮮血の韓紅である、敵の進撃が餘り激しいので、戦員は悉く砲臺の上に立つて防戦し、病める兵士すらも床を蹴つて砲臺に馳せ集るのである。輜重の車は到る處に軋を立て、卓頭には負傷者を満載した車が幾臺となく並んで居る。

全き三晝夜の間、セバストポールは深き苦悶の淵に沈んだ。此時程我が軍隊の際立つて兵員を失うた事はない。日に四千内外の兵士が病院又は墓地に送られるのである。夜間すらも眠みもせで

戦陣に立ち、日中僅に交代して、筒を枕に束の間の夢を貪るばかり、一瞬間だも心をゆるめず、専心一意、相戒めて敵に當つて居るのだ。

四日目の黎明、砲聲は昨日に増して、おどろくしく、八萬の砲銃は數時間セバストポールに向つて發射されたのであつたけれど、何故か正午頃になつてはたと止んで、恰も無人の境かと怪まると思ふ間もあらず、哄と擧げたる関の聲。

「突貫！」

との不運の叫は砲壘の全線に響き渡つた。唯見れば美しく輝ける軍服を纏へる敵の一隊は、巖谷の深さを埋めて、武歩堂々、傍目もふらず砲壘目蒐けて肉薄する、これを名立る佛蘭西兵なのであつた。而して我榴彈の間斷なく彼等の頭上に爆發するにも拘は

らず、彼等は怖めず億せず益々躍進し、今やマラコフ砦と第二砲壘との直下に進んだのである。遙か彼方には、更に又た英兵の密集隊が我が第三砲壘に進撃して居る。

第三砲壘は有らん限りの砲門に裝彈し、群れくる敵に發射したので、密集せる數團の兵は悉く血に塗れて斃れた。其の猛烈な射撃に辟易したか、敵はそろく退却を初めたけれど、忽ちにして隊長の叱咤する聲に勇氣を恢復して、潰亂する列を正し、再び此の密集部隊は突進し、既にして濠上に橋を架して飛ぶが如く我が胸壁を攀ぢ、落雷のやうに襲撃した。我が軍は之に答ふるに天地に震撼する萬歳の叫を以てし、勇悍なる一新技隊は銃剣を見かすつ、彼等に突進する。かくて慘酷たる格闘は開始されたが、さしもの英兵も瞬く間に逆撃され、右往左往に打倒れ、壘上壘下に夥しき死屍を残して退却した。此機逸さず我軍は銃丸、砲彈、瓦礫

を放下して敗走する敵軍に手痛き追撃を加へたのであつたが、彼の隊長は再び隊伍を整へて殺到し、終に我が砲壘を占領した。されど我が軍は屈する色なく再び之を撃退して多数の敵兵を捕虜にした。

敵兵は壘壕内から又も第三回の突進を試みかけたけれど、我が胸壁の高地から彼のたばしる如く彼の頭上に銃丸と石礫とを投下したので、英兵は又も退却を初めたのである。此跡を見すました我が砲隊は一齊に猛烈なる射撃を浴せかけたので、さなきだに隊伍を亂した敵は、この打撃の下に夥しい死傷者を殘して敗走した。

其時佛兵は第二砲壘の壕に迫り、さしも峩々たる胸壁を飛び越えて強猛な突撃の下に我を襲うたけれど、此時早く勇敢なるサハナムスキーはその砲兵を提げ、旋風の如く走せ來つて、優勢なる佛軍を退却させた。敵は一時隊形を亂したが、程なくまた陣を正

して幹々と攻め寄せたのである。銃火交々閃き、喊聲忽ち起り、頑強なる佛兵は能く戦ふのであつたが、時しも忽然として我が軍艦より砲撃を開始し、祖國の爲めに最後の任務を盡すべく。之れが爲めに敵陣風と色めき立つたけれど、嚴として猶隊伍を壊さず、更にまた幾度となく逆襲を試み、潮の湧くに等しく砲壘目蓋けて突進し來たり、其の都度手痛い打撃を受けては又も背進するのである。

今は此迄と覺悟を定めたのか、彼の一將は手に拳銃を持ち、身を躍らせて突進した、全隊の戮貅之に次いで、見る／＼壕中は佛兵で充された。さりながら我が兵は、榴弾、石塊、弾片をつるべ撃にするので、壘に向つて肉薄してくる敵兵は、將棋倒しに斃れ、號泣慟哭の叫は、奈落の底とも謂つべき壕の底から起り、敵は嘗てなき大打撃を受けたのであつた。幸くも九死の中に一生を得た

ものは、累々として打重なり、爲めに自が身を埋めんする死屍を  
衝き除けつゝ、逃げ延びやうと力を盡したけれども、我が再度の砲  
撃の的となつて、溝渠に到達するものとはなく、算を亂して皆  
途上に斃れるので。

遙か彼方には、敵軍又も、第五、第六の砲壘を襲撃して居る。  
かくてマラコフ砦は如何であつたらうか!

(一一一) マラコフ砦の陥落

その突進の初め、佛兵は恰も巧者の放ちし飛箭の如く、マラコフ  
砦に殺到し、その軍旗を塔上に翻へして砲壘の上に展開した。茲  
に於て最後の防禦者たる我軍は、雄辯子の其巢に闖入せる獵夫に  
向ふかのやう、死にももの狂ひに防戦する。恐ろしの格闘は初まつ  
た。銃剣、斧鉞は燃めきて、大鎧、鶴嘴、さては鐵鎚迄も武器と  
なり、石塊や砂礫は四方に飛散し、混戦又た混戦、總ての武器は  
今や用をなさぬやうになつた。格闘の末之を絞殺するもの、齒を  
以て噛むもの、あらゆる活劇は此處に演ぜられ、衆寡敵せざる我  
が兵は眼眩み腕萎へ、思はず死傷者に躓つて倒るゝに至つた。  
血は流れて砲壘の内に漂うてゐる。時しも敵の一隊は壘壁に對つ  
て、微弱なる我軍に迫つたが、我兵は只だ一箇の藥篋を持つて居

るばかりなにも拘らず、此の優勢なる敵に降るを肯なかなかつたので敵は片端より我を狙撃する始末。此の時一人の剛勇なる士官があつて、彼は五十名の手兵を率ゐて敵に突進したが、其の部下の五十名は見る間に悉く殺され、彼一人は重傷を負ひつゝも屈する色なく命を全ふして飯隊した。

副官イヌウニも亦た三十名の部下を率ゐ、マラコフ丘の堂塔に進み、壁上に開かれたる狭隘なる入口より佛兵目蒐つて小銃を急射したので、佛兵は花々しく之に應戦した。然し決死のイヌウニは寡兵を以て能く雲霞の如き敵を支え、奮闘力戦數時間の久しき一歩も退かなかつたので、敵は最後の手段として我に向つて砲口を向けた。

其の一弾は飛來した。  
イヌウニは驍勇なる部下と共に、塔内に水を注いで防禦したけ

れど、一弾又た彼の頭上に落下して、部下の大半は負傷し、猶爆發した弾片は室の一隅に安置してある聖像を破壊し、其の前なる燈架は倒れて遂に火を失したのである。

「嗚呼不祥の兆！」  
と兵士の言が未だ終らぬうち、敵は更らに第三の彈丸を浴せかけた。萬事休焉。此一隊は力竭き恨を呑んで敵に降つた。

丘陵の邊は格闘殊に激烈を極め、我が軍は奪略されたマラコフの砲壘に逆襲を加へたが、強猛なる敵は之を擊退せんとして、四方より透間なく應撃するので、味方は見る／＼十字砲火の挾撃を蒙り、利鎌に稻の刈らるゝ如く、散々に撃ち惱まされて居るのだ。此の修羅の巷を往きつ戻りつ、多くの兵士の妻女等は、手に手に拳果酒と水とを持つて、痛手に苦しむ兵士を介抱して居る。怒る中にクルーレン將軍が來着し、部下の勇卒を従へて鮮血と

死骸に鎖された道を開き、マラコフ丘に馬を躍らし、聖母の像を刻めるいと大なる牌を胸間に燦かしつゝ、凜乎として兵士を顧み、「手に續け、我が勇士よ。」

と叫びながら猛然として前進したので、其と見た雄々しき部下は、彼の後に従つて鴻の翔るが如く忽ち丘陵の上に突進した。此一刹那、俄然クルーレフは血汐に染みてドツと倒れた、弾片こゝに彼の腕を貫いたのである。堪え難き苦痛は彼の勇氣を奪ひ、彼は難僚に導かれて餘儀なく戦線外に立ち去つた。

残る兵は丘陵に展開しつゝ、戦友の屍を小楯に取つて敵に當つて居る、されど將校相續いて斃れたので、「我等に隊長を興へよ！來りて我等を指揮せよ。」と叫んでゐる。

此の時皇子ゴルナヤコッフは馬を駆つて各砲臺の戦闘線を巡視

し給うたが、到る處勇まじき「萬歳」の祝聲に迎へられ、雲霞の如き敵は、その勢に壓せられて退却したのであつた。されどこゝマラコフ砦のみは、依然として敵の手中に陥つて居るので。我が軍は協力一致して、マラコフ砦に突進せんとして意義込んたが、皇子は形勢の正しく非なるを見て、兩眼に涙を浮べ憔悴として、此殊勝の企を評されなかつた。見る影もなく壊れ果てたる砲臺、腥血漲る四邊の光景、さては手足なき屍の地を蔽ふ有様の、あな無残、今茲に幾多決死の士を斃すしても、傾く運のセバストポールは終に敵手に委らるゝものを、最早彈藥も残り少く、既に勇力も竭き果て、流すべき鮮血さへも枯れたにも拘はらず、更に最後の突撃を加へんと幹めさ合ふ將卒の、忠勇義烈は感すべきも、皇子は寧ろ防禦軍の殘兵をして命を全からしめ、露國々旗の名譽を保維するべく、一切の手筈を

定めて居られたのであつた。  
即ち令して曰く、

「マラコフ砦に向つて、更に攻撃するを許さず。」  
一時間ばかり、二時間も過ぎ、轟々たる弾薬の爆烈は兵營内に轟いた、騎馬の傳令使は四方に疾驅して各司令官に諭達を齎すのである。

斯して退却の命令は下された。軍隊は南岬を撤去して北岸に渡すべしと。

「退却！」衆皆深く最後の戦を試みんと腕を撫じて其の時を待ちつゝありし時。かくて衆は最愛のセバストポールの爲めに其の尊き頭を敵に與へんと望みたりし時。如何に敵に後を見せて効なくも退却する哀しさよ。

我等は長き歲月の間、徒らに無意義の防禦に勤めたのか！マラ

コフ砦を奪ひ取す事が出来ぬのか、それが丘上より外國々旗を撤退する事が出来ぬのか、血を以つて彼等に報ゆる事が出来ぬのか……戦員は悉く聲を擧げて號哭し、砲手は砲身を抱きつゝ、血涙に咽んで別を告げるのである。

重ねて命令は傳へられた。

退軍の時は明示されたのである。

されど我が勇悍なる兵士等は戦利品として一物をも敵手に殘さなう。彼等が汗を流し、血を瀉ぎ、生命を賭して造つたものを、如何なればむさく敵に渡す事が出来やうか。聖潔は悉く埋められ。苟くも形を存する砲壘は總て破壊された。斧にて倒し、穿ち貫き、運搬の出来ぬものは悉く爆發せしめ、斯くて多くの砲は解装せられ、急ぎ火門に釘打たれて海中に投せられた。  
人々は市街に騷擾し、砲壘に狂奔して、負傷者を南方の岸邊ま

で移した。  
軍隊は日没を期して市の一處に集合すべき命令を下され、而して敵をして我が退軍を覺らしめぬ爲とて、敵が不時に突撃し來るとも、彼を支へて應戦の出來得るやうに、衛兵一小部隊をば人なき殘壘に屯させてあつた。

(一一一) セバストポールの訣別!!

夜と成つた。さしも廣濶なる街衢も軍隊と住民の群衆とに充ち満ち、老と無く幼と成く、あらゆるセバストポールの市民は城市を見捨てたのである。恰も我が祖先が背てモスコを敵の前に擲ちたる如く。

人もて満たされたる短艇は、蟻の集ふに等しく入江を北岸に漕ぎ行き、更に又た橋梁を渡り初めたが其橋梁の通過は實に七時間の長きに亘つたのである。砲兵過ぎ馬車續き、大小輜重の車輛は又た之に次ぎ、徒歩隊は密集して續き、兵士等と列を同らし班と等うして、婦女、老人、小兒も亦た進み、負傷者も擔架に因つて運ばれた。

輜機たる車輛の響、憂々たる馬蹄の音、喧嗽、號哭の聲は腹拜



たる怒濤の音と合し、時には橋梁は墮落したかとはかり怪まる、  
 ので、其度に群衆は我勝にと押合うては後退る紛亂騒擾は、夜の  
 暗黒なるが故に彌が上に甚だしく、其秩序を整へて事無く橋梁を  
 通過させるに就ては、司令官等の心勞は一方ならぬものであつた  
 マコフの砲壘には火を放たれた。明日の拂曉には、佛兵は丘  
 陵の頂上より、翠滴る庭園と、宏大華美なる我が市街を脚下に瞰  
 視するであらう。而して明晨の鼓角の勇ましく、聯合軍は捷利に  
 酔ひつゝも、幾多の勇壯義烈なる我が將卒の命を殞したセバスト  
 ボール、此等殉難者の鮮血尙ほ四邊に腥きセバストボール、墓畔  
 猶ほ我等の熱涙の乾かざるセバストボールさては偉勳赫々たる  
 黒海艦隊の士官等が永久に眠れる此處セバストボールの天地をば、  
 高運の風に翻々たる旌旗もて包み、幾度か凱歌を奏するであらう。  
 斯くて彼等は露國人の遺棄したる邸宅に、久しき戦闘の勞を慰め

るであらう。斯の如きは、元來敵の熱望して居つた處である。  
 俄然として轟き渡る一發の爆聲に、四邊は震し、天地も動揺し  
 た。海水は其の底より噴湧し、炎々立昇る一條の楯は、暗騰たる  
 天の一方を焦した。今や我が砲壘は我と我手に爆烈されたので。  
 而して此の火焰の中から我が勇敢なる水兵は立ち顯はれ、一個の  
 燭火を手にしつゝ、右岸なる火薬庫指して疾走した。……  
 次いで又大なる爆烈の轟がする。重ねて爆發、又た爆發……  
 全夜を通じて絶え間なく猛烈なる響が絶えぬ。かくてセバストボ  
 ルの全面は、恐ろしい火の海と成た。而して凄まじい光がやがて港  
 灣の沖遠く次第々々に沈み行くにつれ、其餘光は永き間の砲撃に  
 太く損傷せる我が船艦を淋しげに照した。

# セバストポール終

# 王宮の美女

春 鴻 抄 譯

(上)

ノワシンの戦闘は開かれた。  
 狭い隙間を立置めた硝煙濺々と、消えなんとして消やらず、蛾々たるエトロポル連峯の山腹を繞つて、霞の如く、綾羅のやうに揺曳いて居る。

リヒタンスキー大佐の指揮の下に屬して居た、魯國近衛騎兵聯隊の先發部隊は、目覺ましく勇敢に戦つたけれども、奈何せん、雲霞の如く押寄せ来る、優勢なる土耳其の大軍に壓迫されて、思ふ様な結果を奏し得られなかつたので、勇氣満々の兵士等、意氣

天を衝かんばかり、哮りに哮り、彌よ勇を鼓して焦ら戦かつた。抑、這回の侵入軍の、右翼技隊司令官クルコ、將軍は、敵をバ、山脈の彼方に掃蕩せんと、の籌畧を定め、此運動をカロ、ト、將軍の精騎に一任したのであつた。けれど此の計畧は見事に畫餅に期して、先づ眞先に將軍の隊から亂れ初めた。爰にエトロポルバ、コナツクと呼ぶ、甚だ堅固な城塞がある。即ち土耳其勢は卑怯にも此の城塞の内に立據つて、力足らぬ魯國騎兵の前衛を侮りながらに應ひ戦つたのである。何條黙して居らるべき………功名心と名譽心とに只管胸を焦して居る兵士等に、恚迄の侮辱を蒙りながら、什麼で黙して引込んで居られやう。過ぎし數度の戦闘は皆味方の勝利であつた。小瘡也！既に敵の手腕も分つて居る。と思ふと、敵の術中に落入るとは知りながらも、一思に馬蹄の塵と蹂躙つて遣りたくもある、け

れども見す、敵の術中に………と思ふと其も又た愚な話、鐵石の腸も爲めに九廻す、眼を怒らして屹と敵を睨んだ騎兵前衛の人の心中は………僵れるまでも折入つて敵前咫尺に屍の山を築かんとまで戦つて見やうか、亦は殘念ながら昵とならぬ勘忍を仕通して見やうか、と二つに一つを思ひあつて齒齧をした。けれど限ある人力の、什麼に勇氣があればとて、恚くまで懸隔ある陣色を動かして得べき道理がないのである。恚る時しも土耳其軍の砲坐から轟地に榴散弾を雨霰と浴せかけられ、怯む處へ、おどろくしく鳴響く砲聲の間から、戦塵を蹴立つて馳出でた敵騎の蹄に、無念なる哉、味方の戦列瞬く間に縦横無盡に蹂躙せられたので、今はとて魯國騎兵は下馬して徒歩戦を試みては、敵を躊躇し、其寸隙を見渝してはカラツラ方向にと背進する。山路の此處彼處曉曉礮聲立て、重き砲車などは殊に曳き煩ふ

のである。援軍の來つて退路を扶ふものもなければ、忍ぶとすれば、死に勝るの苦痛！戦闘の幕開けてから、絶えず接戦して居た勇士等は、數ふれば早や三日の間といふもの、鞍も下さねば手綱も解かず、無論まんぢりともせなかつたのである。

四

集合の喇叭は響いた。鼓手は退却し來る味方を招いだ。けれど伯爵トロストイ中尉の姿は見えなかつたのである。……遅ればせに集つた負傷者の列にも、戦死名簿の記録にも……共に其人を見出し得なかつた、誰一人として伯の動靜を知つて居るものは無し。

(中)

事件あつてから一週間ばかりも後の事、土耳其侍從副官の導くまゝに、ヒルツ、ツキオスクの門を出て、首府コンスタンノブルへと志ざす一人の魯國騎兵士官があつた。軍服には銃丸の眼跡著く散々に綻びて、腕には血に汚れた白い繃帯が絡れて居る。美しい顔は血色稍蒼褪めて見える、これ捕虜となつたトロストイ中尉であつた。

宏莊なる宮殿を後に、見渡せば浮べるパノラマのやうな美しい景色、眼下に見ゆるボスポラスの清流は見る眼も心地克く青く流れて、大船小船煙を吐いて急がしむる往來して居る。遙かな東亞細亞の彼岸には、城、砦、砲臺など儀容を正して嚴かに聳え立つてる。市街は無数の街道小路參差して夥しい繁盛を極め、市場から直線に走る路上の如きは一入賑かに、寧ろ雑沓を極めて居る。勤工場は公園の松林と相對つて其の宏大な姿を誇顔に、寺院、宮

五

殿、三角塔、兵營、造兵廠、ホテル、噴泉、離宮などいふ、油々しくすさまじい建築物が、古色蒼然とした遺跡と共に、思ひくの色彩を爲して、市街に少なからぬ美観を添えて居る。見れば皆感慨の種子、思慮す風雨幾年、荒るゝが儘に、頽るが儘に、異教徒が暴戻なる放棄に見捨てられたイスラムの遺跡……此の半島と多幸ならしめ、併せて多年、全歐州の敬慕を引いた宮殿玉宇……其イスラムの舊蹟も、殆んど多くは屋根傾き壁頽れ、さしも歴史に因深い此の地も、慙くして新なる市街は、名高きイスラムの宮殿すら……況して名残をのこす古蹟は、僅に指折り屈ふる程しかに残つては居らぬ。堅固なる城郭は殘塊を遺して壞古の思を切ならしめるさへあるに、十字架の飾り尙ほありと覺えて影傾くアルカデイ寺、さてはタウロの宮、ヘリツアル殿、ヘカテの塔、ベイツアンナヤムの護神なるアポロデイ並にホ

サイドンの殿宇、遙かに岸を隔て、セントエレナには、ポノクラトと呼ぶ女神ヒロキシノの神泉など、計へ來たればなかくに數も盡されぬ。獨り壯なる哉、全市の上に高く群を擡んで建たるソヒイン寺は、尙ほ往古ながらの莊麗を極めて、其の周圍に群がる異教徒の建物とは自らに旗色を別にして居る。實や千代經て變らぬコンナナンナノールの比類なき眺望は是れ……萬一不幸にして神聖なるクリストの風習、縦合異教徒の横行に迫害されて世は鳥婆玉の闇となるとても、恚る空想に耽て居る間に、案内者は既に車門前に待つて居た。と心附いた時、流暢なる佛蘭西語を以て、伯爵は嚴めしく構えて居る案内者を呼びかけた。

「お、君！此宮殿を見捨て、余等は何地に向ふにや。」  
「訝り給ふな、伯爵、委細は直に判明す可し。」

と副官ミリアライは静かに答へて、伯爵と對等に車中の床に着  
座した。

稍半時ばかりも過ぎたと思ふ頃、馬車はラファナの狭き小路を馳  
走して、見るからに陰鬱な……唯或る一軒の建物の門前に停つ  
た、涼々しい副官の訪ふ聲に應じて、此の別荘の番人とも見ゆる  
一人のアフリカ人が現れた。

「タハワンヘイは在宅なるや？」

「然り。余は卿の命を俟つ！」と黒人は恭しく答へた。

「然らば、手に次きて！」とミリアライは捕虜を顧みて言ふ。

二人が屋内に入るや、黒人は再び注意深く貫柱を鎖した。

案内に従うて、背高い楓樹と栗木林との間にある薄暗い小屋へ  
と、力無げに辿つて行くと、早や其處にはタハワンヘイが二人を  
待つて居た。

「御機嫌克ふ」と鋭い目撃を以て同宗者に會釋する。

「卿の幸福を祈る！」と副官

「何等の用事ありて來れるにや？」

「お、タハワンヘイ！神聖なる我陛下は、卿に控するに是なる  
捕虜の保護を以てせんとするなり、委細は玉書に認めあらん。」

副官は玉書をタハワンヘイに與へた。

新月に星を示せる美しき陛下の御璽を印せる玉書を、恐るく

開封して、畏んで黙讀して居たタハワンヘイは、

「君命なれば水火も辭せじ、噫！況して……余は必らず、此の  
神聖なる義務を全うせん。」

と云ひつゝ、氣遣はしげに、四邊を盗むやうに見廻したが、その

腕首を飾れる腕輪を揺めかして、

「余は爲さん！余は命する所に従はん。」

と幾度も繰返した。

「呉れくも異教徒の警護を怠り給ふな？」

「安んせよ、神かけて誓はん。余が眼の光慙くてあらん間は……」

……。

「お、さらば余の使節は終れり。」と副官。

「さらば健在なれ、ミリアライ！」とマハマンへイは言ふ。

慙くして副官ミリアライは歸去つた。

マハマンへイは伯爵を磨いて、いともいふせき小屋の内に止め

て、此處を立去つたのであつた。

トロストイ伯爵の一人取残された居室は、回々教徒が野宿の天幕

にも劣る、空漠たる破屋であつた。汚れた白塗の四壁は油繪一

枚の粧飾さへ施しては無い、只背の低い寝道具の、殺風景な六角

板もて張られた床の中央に横つて居る外、机も敷物も、況してや

他の家具の設備などは皆無思ひも寄らぬのである。

夕暮の頃となつた。優やかな黄昏の色は、うつら／＼と眠むが

如く花壇を被うて、暮れなんととして暮れやらぬ天地の静寂さ、唯

だ市場に物賣の喚く聲のみ高く聞える。

伯爵は身も心も綿のやうに、疲れに疲れて床に身を投臥す、と、

急に懐想は遠く隔絶られた戦友の上に漂ふ……噫！吾は遂に

親き友の手から奪はれて……マハマンの谿に包圍せられて……

……身の自由を失ふまでに負傷を蒙つて……而して後……

あゝ無念なる哉、何れの日、我が露國の利劍黄金土を開いて、再

びソヒヤ寺院の屋上に、尊き十字架の目標を植得べき歟、思亂れ

て輾轉する……

稍々少焉して睡氣を催した。何時しかに瞼は固く閉されたので

あつた。

時過ぎてから、夕を告ぐる寺院の鐘の音微に、祈禱の聲、讚美歌の音節肅かに、夜は次第に更けて行く。静かなる市街にも、際果なき海邊にも……………

啊呀！驚いて伯爵の銜と起上らんとした時、閃として眼を射る物の光輝、魔耶神耶、枕邊に立つた一人の老婦、静かに我肩を揺動がして居るのである。

叱ッ！語はんとする口に手……………心置らんやうに、老婦は四邊に眼を配りながら、

「外人來ませ！疾く！く……………」

と解艱い猶太調の早口だが熱心に、

「御身、恐らく殺戮せられん」

「什麼に……………手を？」

と伯爵は急はしく問うた。

「然なり、捕虜なる人を！」

「予には萬國公法の保護あるにわらずや。」

「开はクリストの國にこそ、土耳其は世界の公約を無視して顧るなり。」

「おゝ！然れども、何條予は恠る無法の行爲に首伏し得可き……………」

「無用の抗言ばし爲給ふな、おん身は籠中の鳥なるにわらずや、俺ミリアライの宮城を出づる時立聞きせるに、秘密の使命は餘事にわらず、あはれおん身は、今宵の中に絞殺せられん。」

「ヤ、」と伯爵は驚ける面色に、「そは……………して、何人の手に……………」

「嚴かなる詔享けたる……………」

「タハマンベイなるか？」



「秘密なり、さまで知難し、されど渠は此國に名高き處刑人なれば……。」

伯爵は衝と身を起したが、

「可！……何の罪ありてか知らねども……。」

「静かに！神は御身を憐まん、悟られなば二人の命危きなり、疾く、俺に次かれよ。」

老婦は燈火を吹消し、伯爵の手を執つて庭園に出た。砂礫の上を抜き足さし足、街道と堺して立てる高い壁垣に添うて忍び口まで逃れ來た。而して城門の鍵を取出して密かに音せぬやうに戸を開いた。

「疾く落延び給へ。」

と老婦は伯爵を突出すやうに押遣つて、

「この家に沿うて彼方の寺院を右に折るれば、遙に走る小路あら

む、そを辿らば佛國公使館に到りつくべし、其處におん身は安全に保護せらるべきなり。」

伯爵は許多度感謝の言葉を繰返して、

「此の厚意忘れはすまじ、さは云へ、誰人なれば恚くまでに心を竭して手を救ひ給へる？」

「やんごとなき貴婦人の命に依りて忍び來れるのみ、その人はおん身を深く愛み給ふなり、おん身が滅亡の淵に沈まんを厭ひ給うて……。」

尙ほ伯爵の物語らうとした時、老婦は早やくも關の中に隠れ去つた。

伯爵は小焉憮然と佇立して居た。

遙かに遠く、悠揚として迫らぬ夜番の瓊音が聞える。

伯爵トロストイ中尉は、救命の恩人が教示せるまゝに、佛國公使館に懇つて行つたが、其處に手厚い待遇を蒙つた。實に非難所の好遇は筆にも紙にも述べ難く通常ではなかつたのであつた。此の年の歳末、ヘロウナ陥り、オスマンワイア降伏せりと唱へられたが、翌年の正月アドリアノーヘルに勝つた露軍は騎兵前衛を放つて、烈しく土耳其軍を追撃したので、遂にウツセルハシアの麾下なるシブカ軍も、スライマンハシアの軍隊も相次いで投降した。さしも頑強に抵抗強かつた土耳其も、漸う覺醒して、今や平和を希望したので、疲れた露軍は心待ちに俟つて居た事として、爰に土耳其の議を容れて、怠ち平和條約は兩國の間に締結されたのである。

(下)

伯爵のセントセテカノの大本營に歸つた後、三日ばかり経てから、一人のアメリカの少年が尋ね來て、嚴しい番兵の眼を盗んで、密と窓から探みくちやになつた封じ文を投げ込んで行つた。

トロストイ伯其の一通を披いて見ると、神の威稜にかなひまゐらせぬまゝ、この上とも御運いやましに榮えさせ給はらんと蔭ながらもの、數ならぬ身までも嬉しう存じ、おん身の御危難救ひ、はんとて妾とも、力添え、老女が寸志はもとよりに御幸運強く在すおん身に露ほどの赤誠盡くし、へば妾身にとりて恁程よろこばしき事は之れなく、おん身の上にはさばかりの危難を招き、はまことに、罪深き妾の所業とすのはか無之何ともお詫言さんやうも之なく、おん身の秀で給ひし御姿をひと目見染め、ひしこそ現世の名殘と相成り、哀しさ切めてもにわはれと思召し

下され度く極樂に榮えつる林檎樹はその繁れる枝の蔭にてそ  
 の情人と添ひまゐらすの歡樂ありとか傳へ侍るにうつゝな  
 の現世にはかゝるなまじけの何故に在さぬにてはやらむ妾は一  
 夫多妻なんどいふ汚はしき土耳其の閨房に奴隸となりて身賣  
 られ朝な夕な賈社かたき奥殿に終生この身の不幸を乞つべき  
 ものと變りはてたる賤しきかたはものにいへば恣越しに見た  
 てまつりし耶蘇全宗者におもひの萬か一をも打明けたてまつ  
 らむやうもなく知覺のあらむ限りの現世の哀愁忍び泣きに泣  
 き暮しをりし精魂竭きはてしへば勘忍辛捧も最早やこ  
 れ限りにては神よ赦るさせ給まへ人知れずこそと思居り侍り  
 いひしは大いなる妾があやまちにては異教徒が規約の命する  
 がまゝに妾の生命はこの夕べをなごりぞと定められては玉も  
 石も諸共に一つ炎となしおはらむの情しき切なさをしぬひか

ねいの上にもこの禍もみな妾が身より出でし戀の咎にていへ  
 ば什麼にもしておん身情人を救ひまゐらせばやと盗みいだし  
 いトフアナ城門の鍵はおほけなき神の加護の力もて妾が本土  
 の公使館にまで恙なくおん身をおとしまゐらせ得しこそ偏へ  
 に神のおん力とはやしなから妾が爲めには切めてもの心ゆか  
 しに存じしは云へ此のふみの懐かしきおん手にふれ懐  
 しきおん眼には覽じしははん析にはもとより空蟬の妾の早や現  
 世に長らうべくもいはずあはれ戀にうらがれつるこの身の臨  
 終のきはみに切めてはの美しき懐かしきおん姿の影をだに見ま  
 ゐらすを得ば……今はそれすら叶ひがたき身の味氣なさ儂なさ  
 はあきらめもすすべくいへども此恨のみが現世に唯一つの心  
 遣りに在しし數ならぬくり言偏へにおゆるし下され度く願上

外人を想うて耐えがき戀に悶えつ  
 讀了つて伯爵は、まだ見もやらぬ土耳其の宮女が美しさを想像し  
 た時、深くも渠が懺悔に打れたのであつたが、注意深く文書を延  
 べた上、更に是を疊直して、内洋蕤に確と收めた。  
 バルガン半島の戦役が済んでから後久しく、伯爵が雨の夕、月の  
 夜の追懐は、不幸なる渠が救助者——セルマ、ツキナスク殿の美し  
 き宮女ライラ——に捧ぐる熱誠と感謝のみとであつた。

(魯士戰記抄)

# 王宮の美女 終

明治三十七年八月二十一日印刷  
明治三十七年八月二十五日發行

セバストポール

(定價金三十八錢)

著 者

柳川 春葉  
内田 花旭  
田中 春鴻  
原口 春鴻

發 兌 元

東京市小石川區小  
日向武島町拾市地

國 民 書 院

發 行 人

東京市小石川區小  
日向武島町十番地

原 口 豊 秋

印 刷 者

東京市麹町區有樂  
町三丁目一番地

大 西 鍊 三 郎

印 刷 所

東京市京橋區町  
町二十四番地

三 協 合 資 會 社



製 複

# 故十千萬堂紅葉先生選

蕉門十哲句選

近刊

定價金三十五錢  
郵税金四錢

附錄十哲文選

本書は其角嵐雪、去來、丈草、支考、許六、野坡、越人、北枝、杉風及び凡兆、惟然、尙白等芭蕉翁門人の鏘々たる人傑が千古不朽の名句を彙めたるもの也作者は彼、選者は是、伯樂在りて麒麟あり、麒麟出て、伯樂出づ、名著なる哉、名句なる哉

發行所

牛込區砂土原町  
三丁目八番地  
東京市小石川區小  
日向武島町十番地

錦文書院

新刊小説

## 三尺劍

定價金四十五錢 ● 郵税六錢

抜けば玉散る三尺の  
劍、此の切味と御所  
望とならば、燒刃の  
匂ひを嗅ぎ給ふにも  
及ばず斬れぬか斬れ  
るか、試に先づ一本  
を購うて御覽じ候  
へ、  
其銘に曰く………  
表紙及口繪

富田秋香

- |           |      |
|-----------|------|
| 少壯士官…………… | 柳川春葉 |
| 馬の主……………  | 後藤宙外 |
| 日記帳……………  | 中村春雨 |
| 劍影行……………  | 登張竹風 |
| 美丈夫……………  | 原口春鴻 |
| 宿泊兵……………  | 小栗風葉 |
| 歸客譚……………  | 田中花浪 |
| 鐵橋破壊…………… | 西村醉夢 |
| 這國民……………  | 篠山吟葉 |
| 出征の友…………… | 高須梅溪 |
| 軍事郵便…………… | 泉 斜汀 |
| 貯金玉……………  | 廣津柳浪 |
| 留守宅……………  | 泉 鏡花 |
| 露西亞人…………… | 德田秋聲 |

東京市小石川區日向武島町十番地

國民書院發兌

近刊豫告

さすらひ

柳川春葉作

是春葉氏が苦心の餘に成れる大作戦  
争小説なり著者は文壇の際物師たる  
を好むものにあらずと雖も戦時に於  
ける國民の思想を穿ち家庭の眞を寫  
して一家の觀察を擅にせんとす氏が  
文壇に於ける眞價は世已に定評あれ  
ば茲に贅言するの要なし本編が唯近  
來の大作にして如何に戦時文壇に異  
彩を放つかを見よ

發行所 國民書院

校訂五版

警使者

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

故森田思軒譯●富田秋香畫

警使者一編、是れ叛亂記也、露國の内亂を描けるもの也、  
舞臺を廣茫千里の西比利亞に執り、強猛鷲の如  
き叛將あり、窈窕花の如き美人あり、圓轉滑脱の妙を  
極むるものは、英佛の通信員なり、節婦あり、義人  
あり、狡徒あり、皇帝出で、將軍顯はれ、妖婦出沒す、  
材を戦争に取れども、亦、人を描くを忘れず、全編幾十回、  
端を「新宮の夜宴」に發してより滔々四百餘頁、  
**慘絶！亦快絶**！・變轉極まりなきに眩惑せる讀  
者は必らず飛使ストロゴフに多大の同情を表す可きなり、  
加ふるに思軒居士の筆を以てす、露國の宮廷を知らん  
と欲するものは是れを讀め!!! スラブ民族を知らん  
と欲せば、是を讀め!!! 西比利亞の地理を知らんと  
欲するものは是を讀め!!! 況んやめくら使者一編、讀者が  
消暇の友たらんとして、美裝粉飾に意を凝らせるをや

○菊判四百五十頁頗美本・定價金五十五錢・郵税金八錢○

發行所 國民書院 東京 小石川 區十

泉鏡花新作  
鏑木清方口繪

近刊

式部小路

これ特に作者が稿を起せるもの、天來の想を飾るの筆は絢爛花の如く、輕妙神の如き奇才は天馬の空を行くに似たり、銳利にして刃の如く、才華燦として星をあざむく、これ作者獨特の枝なり、此書また近來の一大傑作、蓋し文壇の珍たるを失はず、恐らくは一讀卷を擱く能はざらむ。

發行所

東京市小石川區  
日武島十町  
國民書院

卯杖

卯杖は今や第二卷七號を發行せり  
卯杖は秋聲會を中心として日本派以外の新派俳壇の根據地なり  
卯杖は每號芭蕉翁の句を叮嚀に講釋して掲載す

毎月一回二十五日發行○

壹部郵稅共十三錢○

卯杖は俳句を募集し俳文を募集し小品文を募集す

卯杖は俳諧に關する諸般の質義に應じて解答を與ふ

卯杖は每號俳諧人名辭書を附録す

東京市神田區仲樂一丁目番地

發行所 秋聲會出版部

醫學士竹中成憲著

# 通俗肺結核豫防法

全 結核菌色刷入  
正價金五拾錢  
郵稅四錢

正確なる統計に據るに洋の東西を問はず七人の死者あるときは其  
一人は肺病なり之に據て日本全國の人口を改算すれば日本には東  
京市を四個集め六百萬人の肺患者を以て「肺結核」豫防に  
年々増加しつつあるに於て我政府此を以て「肺結核」豫防に  
は豊心せざるを得や弊堂即ち多年本病を以て専門とし研究せ  
關する竹中先生の乞ふに據て以て攝生の方針を定めらるべし  
たり浸るる諸君は之に據りて以て加療の道を明にせらるべし  
既に浸るる諸君は之に據りて以て加療の道を明にせらるべし  
々たる小冊子世を益するに蓋し鮮少なざるは弊堂の深く信ずる  
所なり

## 次目書本

一	原名肺體年賦賦飲
二	病壇
三	稱加格齡強業強語草料
四	一
五	一
六	一
七	一
八	一
九	一
十	一
十一	一
十二	一
十三	一
十四	一
十五	一
十六	一
十七	一
十八	一
十九	一
二十	一
二十一	一
二十二	一
二十三	一
二十四	一
二十五	一
二十六	一
二十七	一
二十八	一
二十九	一
三十	一
三十一	一
三十二	一
三十三	一
三十四	一
三十五	一
三十六	一
三十七	一
三十八	一
三十九	一
四十	一
四十一	一
四十二	一
四十三	一
四十四	一
四十五	一
四十六	一
四十七	一
四十八	一
四十九	一
五十	一

## 發行所 鳳文堂

わきが注射  
新療法は本院  
獨得の發明

わきが  
無注射  
根治新療法

花柳病  
痔疾皮膚病  
外科的婦人科  
入院隨時

日本橋區新右衛門町  
注射療  
法專門  
平野醫院  
電話本局二二〇一  
根治者を出す  
既に數百の  
數年の治驗

東京高等師範學校教諭 阿知波小二郎編

# 高等小學算術書

教員用  
全四冊  
卷一 三百頁 美本  
卷二 正價金五十五錢  
卷三 正價金六十錢  
卷四 近刊

本書の特色 形式的方面には其排列に特色あるのみならず方法上にて  
十進法の組立 諸算法形式の有意の取扱 運算諸形式の統一等は他書に  
實質的方面の材料選擇上には實際的材料 地方的材料 國家的材料等網羅  
方的材料との調和策の善良なる恰も各府縣自身の材料たる教科書左の如し  
材料排列上の日常的 郷土的材料より府縣の地方的材料に及ばし國家的  
必要事項の計算方法を心得せしむる事に特殊の注意を加へられたり

農學士恩田鐵彌 中野新右衛門共編

# 小學農業書

全二冊  
定價 卷一 金拾八錢  
卷二 金貳拾錢  
郵稅 一部揃金 八錢

本書は高等小學校及び農業補習學校農業科の教科用書として編纂したるは勿論なれども又農家の子弟にして農事の一環を學ばんとするもの爲にも眞に無二の良書と信ず現に三重山形其他數縣の教科書に採用せられたり

發行所

國民書院

明治三十六年十二月十六日  
文部省 檢定 濟

口繪 十數度彩色石版摺各巻挿入  
口繪 外二冊並整理は彩色摺入

24/7/38



79  
419

徳田秋聲著

小説種ちがひ

近刊

院書民國

秋聲子が筆已に定評あり、此作や氏が千練萬鍛の苦心を經しもの、益々老熟の域に達せしや疑を容れず乞ふ見よ、種ちがひ一篇、奈何に才華噴發たるかを

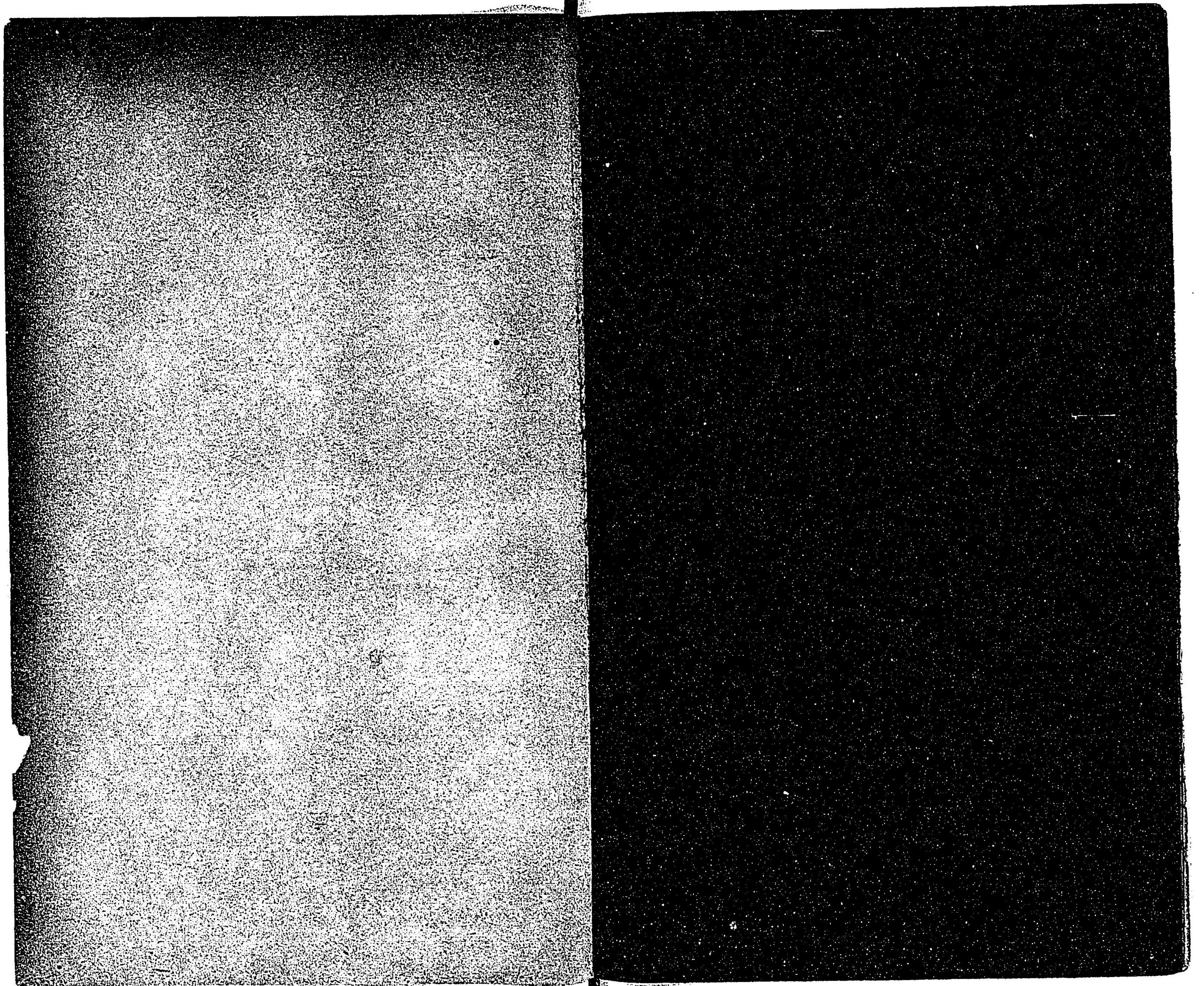
原口春鴻作

小説致命傷

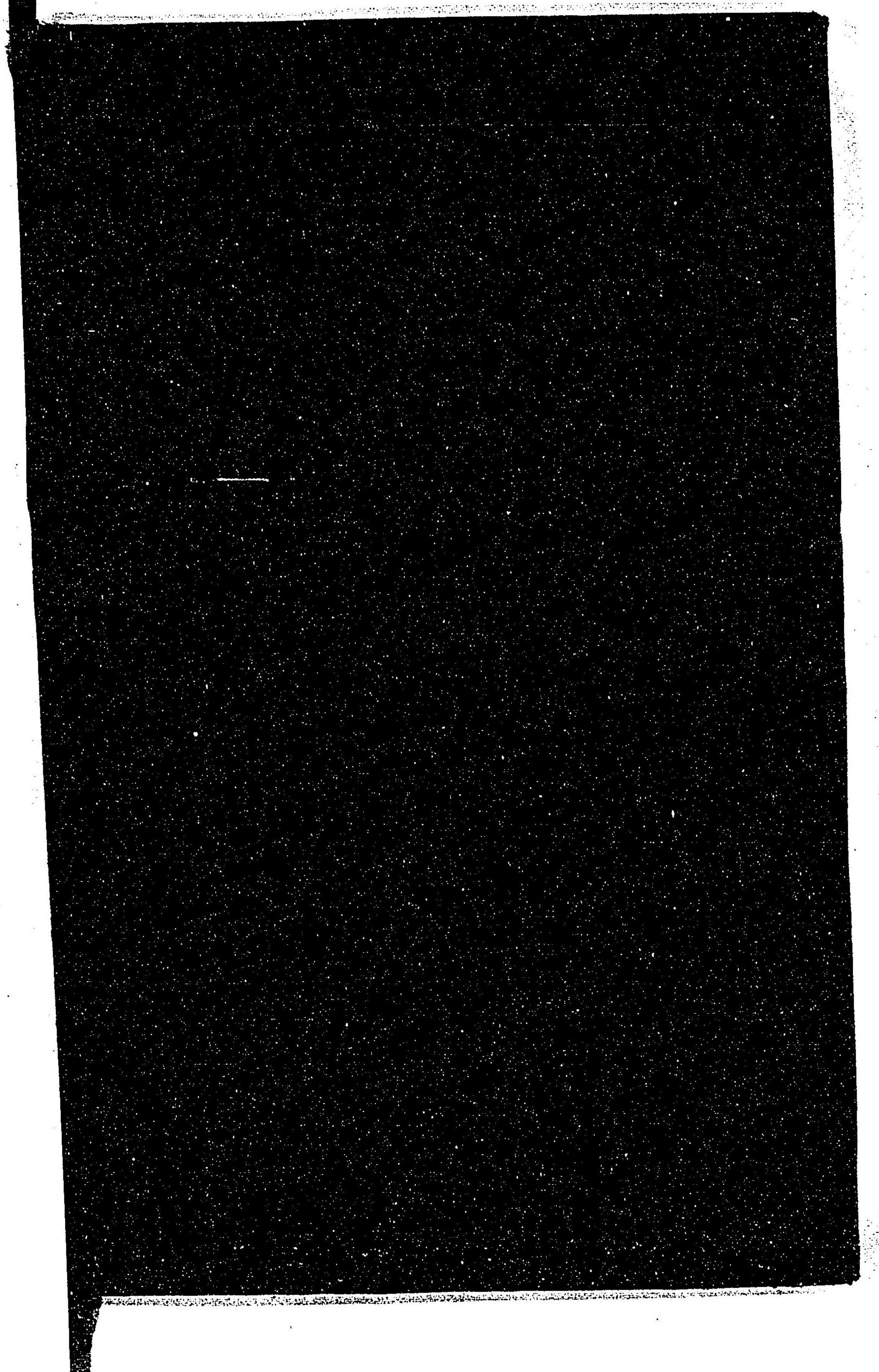
近刊

發行所

あはれ致命傷！年少作家が初陣の作也、これを小櫻絨の鎧にも譬へつ可し、儂なく戦場の露と消ゆるも誰か嘲らん、素より自然なり、若し夫れ武運に極ひて雑兵の首一つにても得たらんには、そは評家の力なり、作者の本懐これに過ぎざらむ



79
419





003687-000-4

79-419

セバストポール

アレキサンドル3世/著

M37

ACD-0296



